

勇氣の振るいところが間違つてゐたので、何となく恥しい思ひが込み上げて来るのを禁ずることが出来なかつた。殊に今迄玉座の近くに席をとつてゐたポーモンが、づか／＼とやつて来て彼の肩をたゞきながら「君はなか／＼勇氣を出したもんだね。イヤ結構々々お蔭でこれまでこのピサンチュームの宮殿に謁見を求めに来た多勢の卑怯者や、野蠻王達の度膽を寒からしめたいたづら道具がなくなつたといふものだ」と笑ひながら言つた時には、顔を紅くせざるを得なかつた。

一生懸命が滑稽になつたほど拍子のわるいことはない。ロバートは全く恥しい思ひで、

「何故また斯んないたづら半分のを、このロバートに仕向けたのだらう、おれは子供でも卑怯者でもない筈なんだが。」

「まあいゝさ、陛下にお詫びでもするさ、これからはそんな滑稽なことをしないで。」とポーモンはロバートの耳許に口を寄せ小さい聲で「君も君の夫人もこれからは僕のする通りにやり給へ、この宮殿は随分變な儀式のあるところだから。」

ポーモンはこれまで長い間、ギリシャ皇帝との交際もあり兎に角ポーモンの言ふことを聞いて居れば間違ひないと思つて、ロバート伯はその忠告をきゝながら今迄にないおとなしい態度で皇帝の方へ近づき、

「陛下の大切な玩具をお壊はし申して相済みませぬ。實は大變能く出来て居りましたものですか、拙者は全くの眞物と思ひ込みました。」と言つた。

皇帝はいつも狼狽するといふことを知らぬ、沈着の精神を有してゐるのだけれども、この時は何となくそは／＼して、恰かもその心持は貴婦人がその大切な寶玉かなんかを、いたづら子供に打ち破はされた時のように頗る未練があり、何やら口の中でこれはギリキヤの王家の累代の寶物で、昔イスラエルの聖王ソロモンの玉座に型どり巨額の國帑を費して造つた、大切なものであるといふことを言ふと、ロバートはイスラエルの聖王とも言はれる人が、何んでまた人を驚かすやうなしろものを造つたのだらうと思議がつた。「拙者だつても今少しで劔を抜くところだつたがそしたら吾が家重代の寶劔をベネ仕掛で駄目にされるところであつた。」

それから後暫らくの間、皇帝とロバートの間には何かと言ひ合ひがあつたが、皇帝はよい加減のところでのその問答を打切つて、騎士達を食堂へ案内する段取りとした。やがて皇帝以外の一同は大膽の守に案内されて騎士夫妻を眞つ先に立てながら、廣い宮殿の中をぐる／＼とまるで迷宮を辿るやうに迂曲して行つた。その長い迂曲の間にも種々不思議の藝術品や、世界各地の珍貴のもの等が飾り立てゝあつて、如何にもこの帝國の富が無限であることを示した。斯うして食堂に

行く間にいろいろ時間を手間取るのは其の時間を利用して、皇帝が別室にあつて衣替をするのであつて、このピサンテムの帝國では皇帝は、二度と同じ服装で客の前に出ないことになつてゐる。皇帝はそのひまにそつと老哲人アゼラスを呼び寄せて祕密の裡に相談をした。

其の様子では皇帝は程激してゐた。一たいギリシヤでは玉座の上にあるものは、人間のあらゆる感情を超越したもので、喜怒哀樂には少しも動かされない筈のものであつてゐるのであるが、この時ばかりは然うでなくて「アゼラス、一たいあのポーモンといふ狡猾な奴を今日の謁見式に列席させたのは誰れの誤りだ。あの荒武者のロバート夫妻にこちらの略策の筋でも告げようといふ奴は正しくあのポーモンではないか、あのポーモンが居ればかりに、すべてが朕の存分にはいかなかつたわい。」

と怒氣を含めて言ふと、老哲人は恐縮しながら「イヤ、それはその——大膽の守のミカヘル・カクタクゼンが何は兎もあれ、ポーモン伯の出席を慫慂したからでございませう。懸念に堪へませぬのは、あのポーモン伯は今夜の中に十字軍の陣營に歸ることだらうと思ひますが。」

「然うぢや、歸つてゴトフレ始め十字軍の全部へ今夜彼等の中の最も勇敢なるロバート伯夫妻が宮殿に人質にとられてゐるとでも告げたら忽ち大騒ぎとなるのぢやが。」

「御必配ならば今夜の中に、ロバート伯夫妻をポーモン伯と共にかへしても宜しいと思ひますが……。」

「返すとは何んのことだ。これ程までに多大の犠牲を拂つて漸くのことを得た好機會ではないか随分と心配もしいやな氣持も我慢して、此所まではこんで来たのではないか。イヤよろしい。朕には覺悟がついた。直ぐと命令を傳達してまだ海峽の此方にある十字軍の將士に對して明朝誓忠の式を行ふ様にするがよい。そして正午頃までには其の大部分を海峽の向側へ渡すことぢや。澤山の贈物を海峽の向側へ届け、其所で太宴會を催さしめ、なるべくこちらの岸にゐる十字軍に早く向側へ渡りたいといふ希望を起させるがよい。それからあとはアゼラス何うぢやらう、ポーモン伯を賄賂で買収するもよし、殺してしまふもこちらの意の儘ぢや。敵は海峽に隔てられて勢力が二分され、こちらの勝利は手にとる様ではないか。——最う食堂の準備も整つたであらう」といつて皇帝はすつかり着替へた自分の服装を見ながら「何うぢやこれで皇帝の威嚴はすつかり整つたであらう、皇帝といふものは信者の眼に映る神様のようになり、臣下の者の前に極めて莊嚴に現はれなくてはならない。」

「然様で御座りますとも。陛下。」

皇帝と老哲人との間に斯ういふ會話が交はされてゐる間に、食堂の方ではすつかり準備が出来てゐた。室内の裝飾は例に依つて金壁裡に贅美を盡したものの、いづれを見ても眼を眩せないものはない。その中央に設らへた大きな食卓は、椅子によつて食ふ婦人の前のは高く、牀に凭れて食する男子の前のはひく、其のにぎやかな凹凸がさなきだに飾り立てた御馳走の數々を、一層にぎやかにして見せる。斯うした大きな卓の圍ぐるりに多勢のお客は、唯だ立つたまゝで今にも大膳の守の手にある黄金の杖が動いたらば、着席しようと思つてゐるのであつた。

この凹凸の食卓の上手の方は、銀の縫箔のついた幕が天井から垂れて覆はれてゐる。大膳の守の眼は此の幕に注がれて少しでも動くのが見えたらば銀の杖で合圖をしようとしてゐるのだ。

やがて自ら動くように、その神秘の幕が空へ擧がると、食卓よりも八歩の階段の上に高くすえられた玉座に神々しく皇帝が座してゐるのが現はれた。皇帝の前の卓は象牙で銀がちりばめてあつて、それにはイレネ皇后、コムネア姫及び皇儲のブレニウスが座してゐる。間もなく大膳の守の合圖で種々な御馳走が出たが、食卓の下位に出された食器は決して上位の方へは廻はされず、杯もまたそれ／＼きまつてゐて、取り替へされなかつたのであるが、皇帝は時々フランスの騎士初め敬意を表したいお客の前に杯を指定するのであつた。

ところでその宴席に於けるポーモン伯の舉動が頗る注意に値する。

ロバート伯はポーモン伯のする通り眞似をすればよいと思つてゐたから、その容子はかねて見てゐたのだが、ポーモンは何も食はず何も飲まず、皇帝から指定された杯さへも唯だ眺めてゐるばかりである。たゞ時々思ひ出したようにパン皿からパンの片端しを取つて食ひ、水差から清水を杯に注いで飲むに過ぎない。そしていくら杯をさゝれても、今日はアドベンの神に祈願の日であるから酒は控へたいといふことを口實にするばかりであつた。で皇帝は

「ポーモン伯、卿が其のように御遠慮さるゝとは朕の意外とするところぢや。今日は折角卿が聖地恢復の征途に上らるゝので、大に祝したいと楽しみにしてゐたのだが、何うでも杯は干して貰いたいものだ。」

「陛下、聖地はまだ程遠うございますから、われ等はひたすら精進をつとめて居ります。」

皇帝はポーモン伯が一向御馳走に手をつけないのを見て、心の中でこれはきつと御馳走の中に毒でも這入つてゐるかと思つてゐるのではないかと思ひ、ズツとくだけた調子で、

「イヤなに、けふは特別の宴會でわざ／＼皇后や姫や、その他重臣達にも列席させたわけで、何ぞ心置きなく杯を交せて貰ひたいものだ。大膳の守、あのミューズの九つの杯を出すがいゝ、

そして波々と注ぐがよい。」

皇帝の命令のもとに九つの杯が出されて、波々と酒が注がれた。杯は純金で作つたもので九つの女神の姿がそれ／＼彫りつけてある。皇帝は先づ騎士の方へ向いて、

「ロバート伯及び美しき伯夫人よ、朕が杯を受けられよ。伯はよもやこの酒をお疑ひはあるま

す。」

「イヤ疑ひがあるとすれば手には取りはせぬ、拙者がよしこの酒を飲まないのが罪ならば、それは極く軽い罪——うちあけて申せば、實はこの隣のポーモン君を先づ見習つてからと思ひまして」とロバートは大きな聲で答へた。

「それでは先づポーモン伯から——伯の禁酒がお友達の迷惑になつては濟まないわけではなからうか。」

と言ひながら皇帝は、ポーモンの方へ杯を向けたが、ポーモンはそれをも遁がれて、

「イヤ、酒ならばロバート君がいくらでも頂きます、拙者はこの匂ひだけで心ゆくばかり御馳走になります。」

と言ひながら、ポーモンは注がれた杯の酒をほかの杯に移して、その純金の上に彫刻されたミ

ューズの繪をさもほれ／＼と見ながら、頻りとそれを賞めると皇帝は、

「ポーモン伯、その彫物は實によく出来て居る。ギリシヤの昔の名匠が作つたのだ。このほかにギリシヤ皇室の自慢として居る有名なネストルの杯もあつて、これは詩聖ホーマーからこの皇室へ傳はつたもの。その形はこのミューズの杯よりはすつと大きい、その彫刻の美しさ及び全體の雅致から言つてこのミューズの杯には及ばない。そこで今夜は十字軍の名譽ある諸將達にこの杯を贈つて征途を祝福したいと思ふが受取つては呉れまいか。」

「陛下、それでは御辭退申すのもこの場がしらけますから有難くお受けは致しますが、實は吾々十字軍の將士は、未だ功を樹てざる前に贈物を受るは恥とするところで——さりながら陛下の深き御思召もあり有難く頂戴いたします。」

といつてポーモン伯は恭々しく皇帝の前にひれ伏すと、皇帝の顔には満足な微笑が浮んだが、それには何となく一種皮肉な嘲罵の氣味が漂つてゐたのはおほひ難かつた。

それを見たロバートは、

「拙者はこの杯は一向欲しくもない、その代り中味は何杯も飲んで御健康を祝してもよい。」
といつて飲みほした。が皇帝は、

「ロバート伯にも御辭退は無用ぢや、すでに一組を御陣營の方へ届ける様に整へて置いたのぢやから——イヤ最う夜の鈴が鳴り始めた、何うぞ寢殿で御ゆつくり休みたい。」

それでその夜の宴會は散ずることになり、ポーモン伯は嬉し氣にミュージズの杯を懐ふところにしながら陣營に歸つて行つた。これは元より狡猾極まるギリシヤ宮廷の策略の一つであつて、斯うして杯の一件からロバート伯とポーモン伯との間に意見の相違を生ぜしめたのである。少くともポーモンの心の中では、ロバートは自分のしたことを卑劣な貪慾のことゝみなしたであらうとの僻ひがみを生じ、またロバートの方では、それ以後ポーモンを碌な相談相手と思ふまいとの念を生じたのである。

十三

ロバート伯と其の妻のブレンヒルダは、その夜寢殿に通されたが相隣つた二つの室に別々に導かれ、しかもその二つの室を連絡する扉には錠が固くおろしてあつた。伯夫妻は何となくそれを變に思つた。

騎士は寢に就く前に神に祈を捧げるのが習慣なのであるが、この夜は二人とも分れ／＼になつ

て俱に祈ることも出来なかつた。

その日はロバートはいろ／＼興奮した日で疲労はしてゐたが、それよりもミュージズの杯で強い酒を多量に飲んだことが場何にも早く睡魔を招き寄せたと見える。ロバートは寢床の中にぐつすりと寝込んでしまつて、やがて眼が開いた時は自分では朝の日のかゞやかさが見られるだらうと思つたのに、それとは正反對に漆の様な眞つ暗い中に包まれてゐた。何となく不思議な氣持がして暗黒の中を見廻はすと唯だ見えるものは、二つの赤い玉が恰かも猛獸が餌をねらつてゐる様にかゞやいてゐるばかりであつた。ロバートは直ぐと寢床からはね起きて、もしも野獸であつたらばとの用意をして鎧を着けようとしたが、身を動かしたその刹那突然に今迄かつて聞いたことのない物凄い大きな唸り聲が起つて森羅に響き渡るかと思ふと、鐵の鎖がリンと引き張られた音がした。それは猛獸が寢床に飛びかゝらうとして急に鎖でとゞめられたといふ感じだつた。唸り聲は益々荒くなつて四方の壁に反響する。恰かも全宮殿がその爲めに震りおの／＼くようだ。その猛獸は前よりかズツと近づき益々近かついて、今にもその手がロバートの體に届きさうである。もうその猛獸の鼻息まで聞えロバートの體と猛獸の牙とは、四尺とは離れてゐない様に思はれた。猛獸は前足の爪で床をあがくと見え板の裂ける音が聞える。ロバートは人類史上の最も勇武な時

代に最も勇武な民族中の最も勇武な騎士として生れた男で、しかもその毛細管の果までも勇武な血が流がれてゐる。とはいへ彼は人間である。この突然に現はれた危険に對して動搖を感じざるを得ない。だが彼の感じは恐怖とか、おのゝくとかいふ感じは微塵もなく、唯だ極度の危険に對して泰然自若として倏忽の中に自分の生命を安全にしようとするのである。彼は寢床の隅の方へ身を寄せて自分の方へ近よつて来る眼を見ながら、自分の腕や足がその牙に噛まれること、その牙が自分の血で紅く染まる光景を突嗟に想像した。この瞬間に唯だ一つたよりになる想像としては或はこれもまた彼の老哲人や皇帝やの狡獪さが、自分の勇氣を試験する爲めにつくり出した偽の猛獸であつて欲しいことだけだ。

彼は苦痛の中にも「さてはこの宮殿のいたづら者が猛獸の鎖を放つて、この寢室を脅かすのではあるまいか、イヤ何、何うせ死ぬなら死んでもいい、唯だフランクの騎士ロバートは死に際して祈りもせねばなげきもせぬといふことを見せる。」と心に覺悟しながら、壁の方へ顔を向けて次の刹那に來る怖ろしい運命をジーツと待ちかまへた。

流石の勇士も此の危機一髪の際に、先づ自己の生命だけを考へて、自我的になつてゐたといふことは已むを得ないことである。その危険が餘りに直接で腦裏に他のことを考へる寸隙の餘裕を

たゞ死に對する覺悟をしたのであつたが、覺悟と同時に一閃腦裏にかがやいたものは、妻のブレンヒルダである。妻はこの命がけの試練を果して勇敢に女丈夫らしく受けてゐるかしら？ 妻は直ぐ隣の室にゐるのか。それともあの扉に鍵をかけたところから思へば、妻の身の上にか何か怖ろしい悪計がたくらんであるのではなからうか？ 妻は今眠てゐるのか覺めてゐるのか、よもやあの唸り聲を聞いて熟睡してゐることはあるまい、よし妻に聲をかけて見よう。例へ怖ろしくとも身動きをしてはならないと警戒せねばならぬ。と思ひながら彼は妻の名を呼んだ。その聲は恰かも猛獸をそゝのかしてはならないと祈念しながら流石に聲は打ち顫るへてゐた。

「ブレンヒルダ——ブレンヒルダ、危険だ、聲が聞えたら返事をしてお呉れ、併し身動きはするな。」

しかし何の答へもない。

ロバートはまた思ひかへした。

「何んの、妻は女丈夫だ、こゝは乳母が赤ン坊を呼ぶような聲を出す時ではあるまいぞ、勇士の恥だ。フランクの騎士ロバートは卑怯ではない、この手も足も噛めるなら噛め。」

とはいふものゝ彼の頭に浮んだブレンヒルダの姿は、かき消されさうにもない。

「ブレンヒルダ、吾等は計られたぞ。返事をして呉れ、併し身動きをするな。」

だが、唯だ答へるものはブレンヒルダの聲ではなくて猛り狂ふ猛獸の唸り聲ばかりである。その唸り聲は恰かも「お前は唯だ絶望のみ」といふが如くで今にもその絶望は彼れの胸板に鋭い牙を通さうとしてゐる。

「だが、妻の身の上は何うだ？ ブレンヒルダ！——ブレンヒルダ——」

すると空ろな冥府の底から来るやうな寂しい、不満足さうな聲で「貴方も可哀想な運命ぢやなあ。この死の魔の世界に落ち込んで生きて居る人の答を聞かうとは望めないことだ。」

「何——おれは立派なクリスト教の武士で、世にも聞えたフランスの騎士であるぞ。きのふまでは最も勇敢なフランスの五百名を率ゐてゐる勇將であるが、今はこの暗闇の中で何れに身も置くところも知らず唯だ猛虎の餌食となるが恨めしい。」

「貴方もまたその一例に過ぎないか、やがて貴方の運も盡きるであらう。俺はこれで三年此所に閉ぢ込められてゐるが、實を申せば現皇帝と位を争つた彼の日の榮華のウルセルのなれの果てぢや。俺は現皇帝の爲めに眼を潰ぶされてこの闇黒の中に投げ込まれた。俺は此の闇の天井の上に巢を造つて休んでゐるのぢやが、時々猛獸が貴方の様な餌が投げ込まれるのを見て喜んで唸り聲

をあげるのに眼がさめる。」

「では貴方は、昨夜この室に勇ましい騎士と、その妻とが投げ込まれる姿を見られなかつたか。」

「オ、ブレンヒルダ、お前と昨夜寢室へ寝る時は、人生の華の様に傲り傲つてゐたが、その瞬間に斯くも酷ごたらしく謀られてゐようとは思はなかつた。」

「イヤ、お待ちなされ。」と自らウルセルと名のるその聲は言つた。この希臘の奸人達は斯くも猛獸を放つ目的は、怖ろしいと思ふ敵にあらずとも、自分より強く、手に餘るものと見れば、斯くひどいむごたらしいことをするのであつて、俺の身の上のやうに焼火箸を眼に通したり、或は貴方の運命のように猛獸の餌食にする、だがそれは男に對してだけのことであつて、相手が優しい美人であつた際には温たかき王者の褥に連れ込んで辱かしめるか、乃至は生涯の奴隸に落してアルギブの泉に水を汲みに行かせたりする。」

するとロバートはきつぱりとした聲で「何人が吾が妻ブレンヒルダを、その様な運命に落し得やうに。——ブレンヒルダ——ブレンヒルダ、御身の良人ロバートは此所にあるぞよ。御身も女丈夫死するも恥は残さない。」と叫んだ。

暫らくの間答へもなかつたが、やがてウルセルの寂しい聲が「哀れな騎士。何やら物音が聞え

るようだが。」と言つた。

「俺には何も聞えぬ。」とロバート。

「だが俺には聞える、俺は眼を潰ぶされて耳は聴くなつたからな。」

「音は何んでもかまはぬ、唯だ運命を待つばかり。」とロバートは沈着に答へた。

その時突然に暗黒の世界が、赤く輝やいて煙が漲つて來た。實はロバートはその一瞬時前から騎士の持道具の一つである燧石を取り出して、出来るだけ細い音をさせながら火を點じ、手探りにモスリンの窓掛を燃やしたのであるから、忽ち焰が上がり煙が漲つたのであつた。火が燃えあがると同時に、ロバートは寢床から跳ね退いた。猛虎は俄に燃え立つた火に怖れて鎖のゆるす限り後ろの方へ身を引いて縮ぢまつた。この突嗟にロバートは其所にあつた唯一の手掛りの大きな樫の木の椅子を両手に差し上げて、猛虎を眼がけて、人間の力とも思へぬほどの怖ろしい酷い力で投げつけた。すると、狙ひは誤らず猛虎の額に命中して倒れるところを、やにはに劍を抜いてロバートは勇ましく其の喉を突き刺し、猛虎が斷末魔の苦痛の上に勇ましく勝利を得た。

彼は猛虎を仆して置いてから、燃える窓掛の炎のあかりで、あたりをぐるぐると見まはした。

そしてすぐと今自分の居る部屋は、前夜自分の寢た室とは全然違つたものであることを發見した。

前夜のあの華美な寢室とはまるで天地の大違ひで、茲は筭の様な凄凉とした牢獄の様な處、もの道具としてあるのは只先刻彼が猛虎に向つて投げつけた、頑丈な樫木製の無細工な椅子ばかりであつた。それにしても不思議なのは今燃え燻つて居るモスリンの窓掛が、此の筭とは調和しないものである。だがその時のロバートの腦裡にはそんなことまで推理して居る餘裕は無い。

彼はすぐと窓掛の火を消し、すこしばかりの燃えのこりを松明代りに手に持つて、此の獄室からの出口を探し出した。云ふまでも無く、その隣りが妻のブレンヒルダの部屋であるべき筈も無い。妻が今何處に何うして居るかさつぱり見當がつかないが、すくなくとも自分は今極端な危険を蠻勇を振つて辛じて過ぎて來た。妻も女丈夫である以上、必ずやその持前の勇敢な度胸でもつて難局を切り抜けつゝあるに相違ないと察するのが唯一の慰めである。何とかはやく妻の許まで行きついて、彼女を救ひ出さねばならぬ。と云ふとその時不圖彼の心には、昨夜すくなくともポーモン伯のすることをもつとよく注意して置かねばならなかつた。伯はあのミューズの杯の酒を一滴も飲まなかつたが、あの酒のなかには非常な強い催眠劑がはいつて居たのに相違ない。だがそれにしてもしあいつは卑怯な薄情な奴だ。此の俺だけに此の様な危険を踏ませながら、自分ひとりだけが遁れてしまつた。」と云ふ様な考が閃いた。

丁度此の時また、先刻の幽霊の様なウルセルと名乗るものゝ空ろな聲がした。

「おゝ。またあなたは生きて居るのか、それとも殺されてしまひましたか。何んだか頻りと煙がたちこめて来る。俺は盲目で何もわからぬ……」

ロバート伯はその聲に對して、

「俺は自由になつたぞ。猛虎は殺してしまつた。君はウルセルとか云つたな。君が盲でなかつたら俺の勇敢な働きを見て呉れた筈だ。俺の今の働を心のうちにでもよく想像して、騎士の物語の種子として末の世までも傳へ残して呉れ。」

と彼は思はずも騎士としての、不斷の誇りが口から奔走つて出るのを禁ずることが出来なかつた。が此の虚榮の心のうちにもはやく妻の許に行かねばならぬと、隈なく荒壁のかしこことを探しまはるうち、不圖も一つの入口を發見したのであるが、その扉には堅く錠がおろして鐵栓が掛けてある。

「今俺は出口を發見した。ウルセル。慥かに君の聲のする方角だ。だが錠がおろしてある。此の扉は何うしたら開くことが出来るか？」

「その秘密は知つて居る。」とウルセルの聲「その扉をあなたの強力で上の方に擡げあげて、それ

から前の方に押す様にして御覽なさい。屹度開きますと思ひます。……あゝ。俺眼が見えるなら何んなにか貴方の勇敢な姿を見たいであらう。」

ロバートはすぐと自分の鎧を一纏めにした。彼の武具は大抵昨夜寝た時のまゝに揃つて居るのであつたが、只失はれて居るのは、かの長劔だけである。しかし長劔はなくとも先刻猛虎の咽喉を貫いた短劔さへあれば大丈夫と云ふので、それ等を一抱えにしなから、ウルセルの聲に教えられた通り扉を開きにかゝつた。もとより頑丈な鐵の扉で、只之れをひた押しに押ししたところで小ゆるぎだにするものはないが、ロバートがその金剛力を出して、ウルセルが教えた秘密の通り上方に擡げたところで、向ふに押して見ると、すこしく開いたので、更にそれに勢を得て、ぐつと押すと、漸くロバートが鎧を抱えて通るだけの間隙が生じたのであつた。ウルセルの聲が、

「オ、。貴方は俺の獄内にはいつて來られた様に聞えます。俺は今まで三年の長い間、此の扉の鐵栓の臺石をすこしづゝ破壊して、やうやく竝までにしたところでありました。之れもみんな此の牢獄の番人の眼を盗むでしたことでありましたが、今こそほんとうに勇士が迎えて來られたので、此の上うれしいことはありません。ですが此の上にも此の牢獄から外の世界に出るまでにはまだまだ幾つか澤山の此の様な扉を開かねばなりません。とてもその希望は空なことかも知れま

せぬが、しかし勇士殿、此の地の底深き筈のなかで、あなたと俺とだけでも會へる様になつたと云ふことは、此の上もない祝福として悦ばねばなりません。

ロバートはぐるりと見まはして、此のまるで生きながらの墓場の様な光景のなかに、幽霊かと思はれる人の聲がするのを流石に身顫ひがするのを禁ずることが出来なかつた。ウルセルの獄室は二間四方位な極せまいもので、壁は石の荒削りのまゝ、天井はまるく、ただひとつの粗悪な寝臺と椅子があるきり、しかもその寝臺の上を横たへてある墓石の上には「ウルセル此の獄内にて□□年□月死去」と云ふ文字が、物凄くもその年月のところを之れから刻る様に空けてあるのが讀めた。それにウルセル自身のそのみすぼらしさは、皮膚や衣の色が壁の石の黝い色と區別がつかぬ程で、髪や髯やは伸びるがまゝに伸び亂れ、さながら妖精かなんぞの様にしか思はれない。「勇士よ。俺の姿を見て、如何に現皇帝がその友を虐め抜いて居るかを察して下さい」とウルセルは淋しい聲を出した。

「ではあなたが、此の三年の長い間、此の鐵の扉が開く様に磔石を磨り減らしたのですか。」

「他に何の仕事もなく、盲目になつた運命を一圖にこの事ばかりをやりつゞけて來たわけです。何しろ三年と云ふものですからなあ。それも盲目で此の筈のなかですから、夜の晝との區別を見

ることも出来ず、遠くの方からほんの微かに聞こえて來る大伽藍カセドラルの鐘の音を數えて、石を撫でながら時間を送つて來ましたのです。ですが暫くのことであなたと云ふ勇士のために此の扉が開かれましたものの、そこもやはり茲にました酷い獨牢のなかかと思へば、とても此の上は太陽の輝く世界に出る希望もありますまい。ですけど、かうして二つの部屋が連絡して、あなたと俺との間に話が出來て慰めあふ様になつた事は、此の上ない幸福と思はねばなりません。

ロバートはウルセルの此の絶望的な心持ちを勵ます様に、

「いやいや希望は更にそれ以上に持たねばならぬ。自由を思へ。復讐を思へ。俺は此の暴虐非道をそのまゝに放つて置くことは出来ない。だが君は此の牢獄で食事はどうして獲て居ましたか。」

「まるつきり言葉と云ふものを話さない、牢番人の様なものがパンの片れと水壘とを差し入れて呉れるので、その度に二三日分の生命を繋ぎつゝ生き伸びて來ました。そして今日にもその不思議な牢番人が來るかも知れませぬから、あなたはやく貴方の廣い獄内に御歸りになりませぬと、見つかつて酷い眼にあはされるかも知れませぬ。」

「すれば此の牢獄の何處かに番人が出入する入口がなくてはならない筈だが、俺にはその見當がつかぬ。がとにかく俺は俺の獄内に歸つて居やう。もし番人がはいつて來たら、屹度何らかの手

段をつけるが、君は必ず黙つて見て居なさい。俺は必ず自由になつて見せるし、また君と云ふ獄友もそのまゝに捨て置く様なことはしない。」

「その御言葉だけを聞いても、俺はやがてさしのぼるべき朝日のその涼しい風を身に受けた様な心持ちがします。たとひ盲いた俺でも、朝日はどの様にか憧憬れて居るもので御座りませう。貴方は必ずあの西殿の方から、武道の爲めに参られた勇敢な騎士の様に見うけられて頼母しい心持ちが湧き出て來ます。俺にとつては人の世の望みは恰も小供が吹く石鹼玉よりもはかないものに過ぎませぬが、貴方の武道の勇ましさを見るだけでも生き伸びた甲斐があると思はれて喜しうてなりました。」

「そんな果無い想ひばかりにくよくよすることは無い。」と云ひながら、ロバートは自分の獄内に歸りながら「何の。俺は死ぬなら紅の血潮を咲かせて美しく死ぬる。さりながらブレンヒルダに會はないで死に果てるとは、いや何んでその様なことが……何の……何の……」

と獨言のやうにつぶやいて、ロバートはもとの様に獄の扉をびたりと閉ぢた。「あの老耄れでなくともつと若い元氣のある人間を發見したなら、俺はどんなに幸ひであつたかも知れぬ。だが神は必ず此の俺を守護し給ふに相違ない。よしあの老耄れた盲目が、俺の手傳にはならず、むしろ

邪魔ものとなるとしても、かゝる悲惨の奥に見出した唯一の友である以上、どの様なことがあつても救ひだしてやらねばならぬ。」と云つて、手にある消えかゝつた松明たまつに不圖氣づき「どれ入口の扉がまだ天井あたりにあるかも知れぬ。俺は空の方からおろされたのかも知れないぞ。何しろあのミューズの酒と云ふ奴はおそろしく俺を癡酔させた毒だつた。」

ロバートは消えかゝつた灯で、あちこちと見まはしたが、どうもそれらしい出入口を發見することも出來ず、とうとう彼は灯を消して一切を暗くし隅の方にかくれて入つて來るものゝ様子を見さだめるより他によい方法は無いと考へた。で何よりも先づ猛虎の死骸を隅の方に片づけて置かねばならぬと思ひ、他日太陽の輝く世界に出たならば、猛虎の頭を兜の頂に飾るこそ自分の功名の素敵な表號だなどと流石騎士らしい空想を描きながら、死骸を片隅の方に引きよせ、それに寝具だつた布を蔽ひかけた。そして灯を消さうとする刹那のうちに、灯を消したら最後最早やこゝは暗黒で悪魔の領だ。悪魔が襲つたら灯より他に手段は無いのだが。」と考へたが、また「何の……何の……われこそはかの「破槍の淑女」に願かけた勇士ではないか。暗の悪魔を怖れるとは騎士らしくもない。「破槍の淑女」は必ずや此の暗を透してもわがブレンヒルダに再會の機會を與へるに相違ない。」と云つて灯を消してしまつた。

世界はたゞ暗。彼は心のうちで犇と妻の身の上を考へて感慨のやる瀬も無いものがある。彼は飽くまでも妻の貞操を確信し、その勇氣と活動とを無限に期待して居る。——あゝ。妻は天の露の様に純潔だ——天がなんでわれ等を見捨てることがあらう。」

十四

ロバートは壊れた寢臺の蔭に身をひそめて、餘程強い光線を一時にばつと閃かす様なことをしない以上、容易に他に發見されない位置をとり、そつと片圖を呑んで、いつたい牢獄の番人は何處から何うして、パンと水とをウルセルにとゞけるのであらうかと待ち構えたのであつた。そして長く待つて居る間もなく、彼の期待なるものは現れた。

天井のところにチラツと光りの様なものが見えたと思つたら、忽ちそこに窓が開いて、上の方から、

「そら、飛びおりて、はやく歸つて來い。森の鬼よ。跳ねたけ跳ねるがいゝ。」

と云ふ聲がした。その聲がまた如何にも妙な人を馬鹿にした様な響で、それに對する答も何んのことだかロバートの耳には不可解なものであつた。するとまた

「ソーラ。飛びおりるんだ。何……懶け者ぢやな。梯子が欲しい。馬鹿な。そら機みよく飛びおりろ……」

すると何んだか姿は人間の様だが、馬鹿に背のひよろ長い、おそらく二間近くもあらうと云ふものが極めて輕快に飛びおりて來た。巨人と云ふ感じだ。手も足も不調和な程長く、左手にかゝりの煙る松明たいまつを持ち、右手には何んだか眞田紐まいたづなの枷かぎの様なものを持つて居て、上から飛びおりると同時にその紐がくる／＼と解けて天井と連紹して居る。だが此の巨人的なからだの吊せさうな強い紐であるとは思はれず。實に巧妙に天井から飛びおりて、足が下につくと思つたら、すぐとまた頭が天井にとゞくかと思はれるほど、輕快に飛びあがつた。それと同時に彼の左手に持つて居る炎は消えてしまつたが、彼はすぐとその松明を頭の上で非常な速力でぐる／＼とまはしたから再び火が燃えついて來た。ところがその拍子に不圖左の手を炎にあてたと見え、火傷でもしたか、左手をぶるぶると振りまはしながら妙な聲で叫むだ。

上の方は、

「オイ。氣をつけろ。森の鬼。」と云ふ聲がした。一忘れちやいけないぞ。あの盲の老筆れのところにはやくパンと水とを持つて行くんだ。おい。そんな處で遊んで居る様だと、二度とこんな使はさ

せないぞ。」

何んだか正體のわからない、其の巨人的な怪物は聲のした上の方を見あげて、怖しげな齒をむきだして返辭らしいものをして、そして拳を二三度ふるくと振つた。そして着て居る變挺な恰好の上衣の様なものゝポケットに片手をつきこんで、鍵をとりだし、盲の老人の居る牢獄の扉とところに行き、巧者に松明を消えないやうにたてかけて、鍵で扉を開いた。それから更にポケットに手をつき込んで、パンの片と栓のしてある水壘とをとりだし、長い手を牢獄のなかにいれて、空いた水壘をとりだし、それに水を注ぎ足し、パン片をいれると同時に、食ひかすの古いのを浚ひ出した。そしてそれを悪戯心でもあるのか一口頬張つて見たが、すぐと怖しい齒を向き出して投げ捨ててしまった。ロバートは影の方から、此の怪物は何をするのかと呼吸を殺して見つめたロバートの眼にはこんなに胸の割りに手足の長い、そして之れ程凶悪な怖しい顔付をして齒をむきだし、その舉動が飽くまで超人間的なところから、何うしても悪魔の姿としか映らなかつた。とにかく此の闇黒な冥府の様な領域に棲むで居る魔者に相違ないが、しかし天井の方でする聲はずつと人間味があるのはどうしたことか。何れにしても之れは神變不可思議な術を心得て居るものが、魔物を呼び出して居ると考へる外に考へやうがなかつた。ロバートは腕を撫しながら、

「何んのこれ式な……若し猿風情なものだつたら、すこしでも怖れを抱くと云ふは騎士たるものゝ大恥辱だ。正體は何んだか知れないが、何れにしても悪魔の如き姿をした野獸に違ひない。猿にしては今まで見た猿よりも幾層倍も大きいのが不思議だ。此の奴、兎も角も俺に天井の入口のあることを教えて呉れたと云ふもの、もつと心を靜かに、その様子を見とどけてやらねばならぬ。」と考へた。

見て居ると其の怪物はあちらこちらを歩きまはつて居るうち、とうとう虎の屍體を見つけ出した。頻りと觸つたり揺すつたりして居たが、如何にも騎虎の死を悲しむ様な、不思議がる様な顔つきをした。が突嗟に此の怪物は誰か猛虎を殺したに違ひないと云ふ事に思ひあたつたらしく、見て居ると、俄かに衣囊に手を突込むで、再び鍵を探り出して、ウルセルの獄の方を目がけて動いて行つたので、ロバートの心は悚つとした。はやく何とかせねばあの可哀さうな盲目の老人は此の怪物のために殺されてしまひさうになつて來た。だが怪物は鍵を手にしたまゝで別に扉を開かうともしない。之れは此の怪物にも明白に猛虎が、あの老筆爺に殺される筈はないと悟つたらしく、誰かもつと強いものが殺した筈だと、すぐにあちらこちらを見まはし出した。

そして悠々と何んだか口の先を尖らして、ぶつ／＼つぶやきながら、隅々を覗きまはつた。そ

の恰好が人間らしくもあり、さうかと云つてもとより人間である筈もなく、壁づたいに手さぐりをしながら、それでも蹙音を忍はせるつもりか大きな股をかへながらも警戒した態度で居る。

思ふに希臘皇帝が多額の國帑をあげて動物苑を營み、世界から珍奇な巨獸をあつめて居ると云ふ點で、今此のロバートの眼に映つて居る怪物然たる動物は、必ずや巨大なる猿の一種であつたらうと察せられる。即ち馬來語で「森の男オウラング・マン」と呼ばれて居る猩猩の類ではなかつたらうか。此の猩猩種の猿は他の猿に比較すると非常に伶俐で、人間の命令をよく聞きわけける特長がある。が今それを臆測するのは古史に對する潜越沙汰になるかも知れないから、何とも明言しない方がよいかも知れぬ。只近代でも南洋のスマトラに背一丈近くもある大猩猩が居たことから推しても此の古い十字軍の時代に希臘宮廷の動物苑で、或は猩猩が飼ひ慣らされて居たかも知れず、もとよりその當時にあつては、西歐の騎士達にとつて猩猩なるものは智識の域外にあつたものである。

とにかく此の様な怪物が、コバニーが匿れて居る近くまで、のそ／＼とやつて来て、松明をつきだした。茲にロバートと怪物とは何れが負けるかわからない、争闘せねばならぬ運命になつたのであるが、ロバートは出来るだけ落ちついて身構えをしながら、手出しをするのを控えて居た。怪物が刻々に近づくに連れて、ロバートの心は生涯始めて出くはす斯んな不思議な正體のわからぬ敵に對して、動悸が益々波うつて來た。そしてとう／＼怪物は寢臺のところまで近づいて來てロバートの眸とびたりと出あつた。此の時の怪物の駭きやうは、まさしくロバートが此の怪物を始めて見て駭いたのよりも幾層倍のものがあつたと見え、倏ち三四間を一飛びに後ろに退いて恐怖の本能に籍られた。そして兎に角出来るだけ安全な距離を置いて、自分の恐怖の對象物をよく見届けやうとするが如き態度をとつた。ロバートは兼ねてから用意したことだが、壊れた寢臺の材料から棍棒のやうな一片を擇び出して、手に堅く握つて此の怪物に相對したのであつた。

おそらく此の怪物が、斯くまでに慣らされるには之れまでに大に棍棒の痛い教訓に依つたことは察せられる。此の怪物にはまだその痛い記憶がまさ／＼とあつたことは、その時すぐとロバートが觀破したことで、ロバートは慧敏にもそれを利用して、先づ氣を以つて敵を呑み込むでしめた。彼は勇ましく攻勢をとつて立ちあがつて、さながら勝利者の高い位置から臨むやうに、棍棒をうま／＼綾吊りながら、ぢり／＼と怪物の方に進むと行つた。一方怪物の方は明白に受身の立場になつてしまつて、用心しながら後に尻込みするばかりであつたが、もとより相手に對して、氣勢を示すことは忘れない。忿怒と敵愾との、妙な唸り聲をあげて、燃えさしの松明を相手に突きつけながら、今にもそれでもつて擲りかゝつて來やうとした。もとより腕力の點から云へばロバ

トは到底及ばないのであるが、彼は對手が恐怖を感じて居る間を充分に利用する點で抜け目が無い。矢庭に先づ敵の右の頬に一撃を喰はして、引き續いてまた左の頰を鋭くあたつた。そして怪物が倒れるところを、上から乗つかつて短劍を擬し、その瞬間にも生命を奪ひとらうとした。だが猩々は最初短劍を擬せられた事が何の意味かわからず、すぐとロバートに掴みかゝつて跳ねおきて來たので、あはやロバートは力負けをしかけたのであるが、騎士の短劍の斬れ味は鋭く猩々の腕を傷け、その痛さに始めて自分の生命は最早や對手の意のままである事を知つた。で、その上の抵抗を控え、俄かに深刻な悲しい泣き聲を出した。その悲鳴が如何にも人間と共通したものがあつて、對手の心に憐愍の情を唆るが上に、猩々は傷いた手で自分の顔を蔽つた上にも出来るだけそむけて、自分ながらの酷たらしい斷末魔の凄惨を見まいとする態がいぢらしい。

ロバート伯はもとより武道にかけては剛のものであるが、測隱の情に動かされない程の非情の騎士では無い。特に彼は自分よりも劣等なものに對する時は、飽くまでも寛容な心を持つ。彼は考へた。——「此の不運な怪物の呼吸の根を今絶たゝねばならぬ必要が何處にあらう。或は此の怪物の魂は去る騎士かなにか兎もかく身分あるものが運命に弄はれたなれのはてで、此の地獄の様な土牢を出入りするために、こんな姿に變化してしまつたものとも限らない。それならば殺すの

は罪だ。騎士の魂から云へば救ひ出してやる可きものかも知れない。よしむば野獸にしたところで、助けてやつて有難いと思はぬ道理は無い。昔、希臘の奴隸のアンドロクレスは獅子の足の棘を抜いてやつた爲めに思はぬ恩がへしをされた例もある。慈悲の心とはこう云ふ時の事だ。——

彼は斯う思ひながら掴まえてゐる手を緩めて、猩々を立たゝせる様になると、野獸ながらもその心持ちがわかつたと見えて、低い哀訴するが如き調子の聲で、ロバートの慈悲に縋つて、深い感謝の意を示す態度になつたのであつた。そして血潮が垂れて落ちる自分の腕を眺めながら泣いた。もう自分は絶対の弱者で、たゞ／＼お助けを願ふばかりだと云ふ態度を見せるので、圖體が巨人的なさへ云ふに云はれぬほどいぢらしく見えるのであつた。

ロバート伯の内側の衣囊かぶさのなかには、武器にかくされて、すこしばかりの瘡藥かさぐすりや繻帶じゆりの片やがあつた。これは中世の騎士時代では、武士はいざと云ふ場合の必要に持つて居なければならぬものであつたのである。彼はすぐとそれを取りだして、對手の血にまみれた手を出せと云ふと、猩々も躊躇しながら痛い腕を差し出した。ロバートは此の藥は武勇ある騎士が、傷いた時にこそ用ふ可き名譽ある藥で、汝如き獸類に用ゐるには勿體ないがなどと、つぶやきながらも叮嚀に親切に心を置めて繻帶してやつた。しかし心のうちでは、若し此の藥を怪物が輕蔑でもしやうもの

ならば、鋭利な短剣で一刺しだと云ふ一髪の際も見せない堅固な用慣は勿のことだ。

怪物は暫くの間ロボートの顔を凝視^{まじ}めて居たが、恰も騎士の心持ちをすつかり了解したものゝ如く、何か口のちぢでむぐぐと云ひながら、身體をひれ伏し、騎士の足に接吻をし、繻帶された手で無恰好に騎士の脚に抱きついて、深い感謝と永久の忠誠とを誓ふ身振りをした。で騎士は安心し、寢臺のあるところまで行つて腰をかけ、何れ天井の扉が再び開くこともあらうと思つて、閑い空を見あげながら其の時を待つと、怪物も亦騎士の視線に沿ふて天井の扉を見あげて、神妙に奴隸の如く侍るのであつた。

待つ間は一時間位もあつたらう。聽て上の方から微かな響がした。すると怪物は騎士の袖をひいて注意した。口笛が二つ三つ聞こえたが引續いて前に聞いたと同じ聲で、「おい。森男！ 森男！ 何處を迂路^{うろ}ついて居るんだ。すぐと來ないか。來なけりやあとで酷い目に遭はせるぞ。」と叫むだ。

森男は此のおどかしの言葉をよく了解して居ると見え、俄かに心配さうにおどくと騎士の身に寄り添つて頑是なく騎士の保護を願ふらしい風情を見せた。騎士は自分の言葉が森男に通ずるかどうかは度外視して「おい。こら。何をお前はそんなに怖れることがある。俺がお前の味方に

なつて居る以上、大丈夫ぢやないか。」と云つた。すると天井の上の聲が、

「森男！ 貴様一疋ぢやないのか。そんな物の言ひかたをするのはいつたい誰だ。牢屋で死んだ人間の幽霊にでもとつゝかまえられたんぢやないか。それともあの盲目の老筆れとでも話をして居るのかい、それともまたお前は人間の言葉が話せる位に劫^{ごう}を経て來たのか。はやくのぼつて來ないか。何！ 梯子がほしい。馬鹿な。お前は天井まで飛びあがれる癖に。さあ。早くのぼつて來い。と云ひながら上の方から繩梯子を下におろした。「おい。あまり面倒をかけさせると後で酷い眼にあはせるぞ。さあ。今あがつて來さへすれば鞭はゆるしてやる。」

森男と云はれた怪物は、此の言葉に心を動かして、騎士の方をおろくした眼付きで見居たが、許可を得たい様な身振りをして、のこくと繩梯子の方に近づき、それでもまだ氣になると見えて、騎士の方を振向いて顔色をうかゞつた。が騎士は短剣を手に翳して怒つた顔付をして居るので、森男は慧敏^{しん}にそれを悟り、すぐと繩梯子から離れて、騎士の後ろに飛びのき、天井の上の人から瞰^{にら}まれるのが心配になると見え、騎士の身體の影にかくれるやうに、その巨大な體を縮めて居るのであつた。

暫くすると上の方の番人は、勘忍袋の緒を切らしたと見え、森男の愚圖々々に業^がを煮やしなが

ら、繩梯子をつたはつて降りて來た。片手に一束の鍵を持ち、片手を繩に身を支えながら、籠燈かんと提灯ちとうの様なものをぶらさげて居た。が降りるがはやいかすぐとロバート伯の強い手で、頸筋を抑えられてしまつた。番人は最初それは森男が悪戯しんげどころであるのだらうと思つたので、

「こら。森男しんなん、悪戯しんげが過ぎるぞ。巫山ひざけ戯ると殺してしまふぞ。」

と云つたが、

「殺してしまふぞ。」と騎士はすぐと其の言葉を逆に返して、相手の度胸をすつかり奪つてしまつた。番人はあはたたくも魂も抜け出る様な聲を張りあげて、

「人殺しだ！　ヘレワード様。助けて下さい。」

と天井の方に向かつて絶叫した。が伯は相手の咽喉をぐつと抑えて聲を止め、引きたほし、その上につかつて短剣で咽喉を突き刺した。がそれと同時に上の方からは鎧の響がして、剛勇なヘレワードが降りて。來た番人の手から轉がつた籠燈提灯の照らす光で。斷末魔の番人の血みどろの姿がヘレワードの眼に映つたので、彼は矢庭に救助すべく騎士の背の方から頸を鷲掴みにして手酷く抑えつけてしまつた。ロバート伯はもとより剛勇を極めたものだが、ヘレワードも亦剛勇にかけては匹敵が無い。たゞ此の際ヘレワードの方がよい形勢をとつただけである。此の勝負は

どちらがどうとも判断がつかない。ヘレワードは張りの強い聲で、

「神妙にしる。おとなしく獄屋に居るならよいが、さもないと此の短剣で突き刺すがよいか。」

と云つた。ロバートは突嗟に此の新たな對手が何者かであるかを呑み込み、

「佛蘭西の騎士に對して神妙にしるとな。汝如き奴隸風情に屈するものか。」と大聲に叫び、強い力で立ちあがらうと身を藻掻もがき、おゝかた自由になりかけたところであつたが、ヘレワードは極度の力を出して、尙ほ優勝の地位をつゞけながら、短剣を引きぬき、一刺に騎士を殺してしまふとするその間一髪いっぺんの刹那、俄かに人を馬鹿にした様な突拍子もない大きな笑ひ聲が、からりと響いて來て獄内一つばいに反響した。そしてそれと同時に、ヘレワードの後ろ頸を馬鹿強い巨きな毛むぢやの手が巻きついて、彼を後ろさまに引き仆してしまつたので、ロバートはその隙に立ちあがつて、相手に對することが出來た。

「ウヌ。野郎。」とヘレワードは誰れとも察しがつかずに叫むだ。が森男しんなんはすぐと人間の復讐が怖しくなつたか、ヘレワードと騎士とをその場にのこしたまゝ、電光石火よりもはやく繩梯子を攀ぢのぼつて天井窓にあがつてしまつた。

一瞬にして龍虎相撃つ以上の血の大活劇が演じ出されやうとする形勢である。雙方とも背が高

い堂々とした偉丈夫で、雙方とも鎧を身に纏つて居り、雙方ともその手には鋭利な短剣がある。お互にちり／＼と睨みあつて、相手の隙を見抜いて撃つてかゝらうと、お互に一分の油断を見せず嚴重な身構えに刻々と、お互に全身の汗を流す、若しその打つてかゝる一撃を過つたらそれが最後だ。その時不圖天井の方が煌々と明くなつて來た。見れば例の飛びあがつた森男が新たに燃えたつた松明を手にさしのべて、驚異にうたれた頓狂顔をして覗いて居る。ロバート伯は大音聲をばりあげて、

「わが好敵手。花々しく戦へ。われ等の勝負は最早や晴れの勝負ぢや。闇の中の喧嘩ではない。」と叫むだ。その聲と共に勇士のヘレワードは空を見あげると、如何にも森男が怖れおのゝいて變挺な顔面表情をやつて居るのが、好奇と恐怖と半分々々の心持ちに見られ、此の一場の勇士が必死の場面を滑稽化して居るやうで、思はずも笑がこみあけて來た。

「なんだ。森男か。勇士の晴れの決闘を愚にするものだ。まるで馬鹿踊でも見て居るやうな恰好ぢや。」

と噴きだした。

「ならば、何も此の場でわれ等の雌雄を決する必要もあるまい。」とロバートが云ふと、

「如何にもさうぢや。吾等には何もこんな場面で命を賭けあふ程の私怨は持たぬ。野獸に見られながらの勝負は勇士の恥ぢや。察するに貴殿は勇名高き佛蘭西の騎士ロバート伯爵で、昨夜、猛虎と同じ寢床に送られたその人では御座らぬか。」

「さうだ。」とロバート。

「その猛虎は何處に？」

「あそこに。」とロバートは指しながら「いや。最早や恐るべき猛虎でも何んでも無い。くたばつてしまつた。」と云ふので、ヘレワードはその方をよく見ながら、心中深く愕いて、

「これが貴殿の腕で……」

「いや。なに。」とロバートは平氣な顔、

「して、また貴殿は番人も殺されたか。」

「可哀相なことをした。だがまだ呼吸の根はあるかも知れぬ。」

「よく見てやらう。」と云つてヘレワードは仆たした番人を身をかゞめて見たが「いや。冴えた御腕の一刻に……いやまだ蟲の息はある。」とつぶやいて、灯りに照らして創口を調べて居たが、その番人は斷未魔の苦しい呼吸のうちにも、眼を見開いて語りだした。

「……あなたは戦斧隊の勇士……今は際に白状いたしますが、手前は何時かの夜に凱旋門のところでああなたの生命をとらうとした不心得者で御座います。今その罪が酬めてあなたの前に死にます。……」

と云ひながら、ヘレワードの腕に抱えられたまゝ呼吸をひきとつてしまつた。ヘレワードはその死骸をそつと牢獄の床の上に置いて、

「不思議なこともあるものぢや。拙者は此の番人の爲めにも、貴殿に對し晴れの場に怨をそゝいでいゝかと思ひもしたが、今彼が最後の言葉を聞くと、拙者の生命をねらつた泥棒根生の奴、されば彼の爲めの怨みはさら／＼ないが、しかし拙者は貴殿に對しては民族としての深き怨みはある。だが、茲は牢獄であつて見れば、もとより勇士の勝負すべきところならず。拙者は今貴殿を何とかして此の牢獄より明い世に助け出さうと思ふが、その義の爲めに、他日貴殿も、貴殿の民族中の一番強い勇者と云ふ資格を以つて、貴殿の武器一切をつけられた上で天晴れの勝負を、此のヘレワードと試みては下さるまいか。」

「此のロバートが卿の敵か友か、何れにしてもそれは問はず、此の牢獄から拙者を案内して出さうとならば、今は何處に居るか皆目判らないが、何れにしても此の獄内の何れかで、憂目を見せ

られて居る拙者の妻ブレンヒルダの許にも案内され度い。然る上は、卿の屬する階級が如何にもあれ、また卿の屬する民族の状態が如何にもあれ、それは一切必ず問はず、此のロバートは卿の爲めに畢生の友となるもよく、また卿が望むところならば、名譽ある戦場で、晴れの好敵手ともならう——われ等の勝負は憎悪から生れる勝負ではなくて、武道の名譽にかけての勝負ぢや——敵としても友としても實に頼母しい。此のロバートは拙者の祖父のシャレマンの名に賭けても、また拙者達の武道の女神の「破槍の淑女」に誓つても、今それを誓ふぞ。」

「よくこそ云つて下された。生命を賭けて貴殿の淑女をお探し申さねばならぬ。貴殿こそ拙者にとつては、拙者を奴隷の境涯から、騎士道の名譽に引きあげて下された大恩人、——いや今は一刻も躊躇に時を過ぎては居られぬ。貴殿と拙者とは心をついにして、はやく伯爵夫人の御處をつきとめねばなりません。」

「尙ほこの上にも願ひを添えて掛けることは、あまりに卿をわづらはし過ぎて心苦しく、むしろ黙して居るが禮儀かと思ふが、もひとつ拙者の望みに叶つては下さらぬか、卿がその崇高い武道の本性を有せらるゝ以上、われ等が武道の徳を飽くまでも瑕なき壁として卿がしたいからでの事ぢやが、——此の凄惨な獄内には拙者以外今一人哀れな盲目の老人が、此の三年の間たゞ水と

麴麴とだけで絲より細い生命を繋いで居るが、卿は如何思はるゝ？ 此の老人をも救ひ出さずばわれ等が武道の瑕とはならないであらうか。」

するとヘレワードは感極まつた聲で、

「まことに貴殿こそは、古今武道の龜鑑として、その崇嚴な御心を拙者は仰ぎ見すには居られませぬ。貴殿御自身が此の悲惨のなかにありながら、尙ほ他の不幸に御同情を有せらるゝとは、貴殿の武士道の古今に絶したところ、神も及びませぬ。」

「われ等佛蘭西の騎士は、此の世にある人間の不幸を數多く減ばせば減ばすほど、われ等が尊む聖者の心を慰め、「破槍の淑女」の爲めに祝福となる。ではヘレワード殿。われ等の決心を躊躇のまゝで置いてはならぬ。頼母しい卿を見れば、一刻を惜むで着手したいが、先づ妻のブレンヒルダを救ひ出せば、二人の協力が三人となつて、他を救ひ出すにも都合がよくなるわけ、急がう。急がう。」

「それに越した事は御座りませぬ。先づ伯爵夫人をお救ひ申して、次に三人で力を協せあの哀れな盲目の老人を救ひませう。」

十五

その同じ日の午頃に、老哲人アゼラステスは、アキレス將軍と例の埃及寺院の廢墟の跡で、こつそりと話しあつて居るのであつた。その時の此の二人の気分には、餘程の相違があつた。アキレス將軍の方は日頃にも似ず、すつと悒鬱で、思案に暮れた體たらくで、絶えず下向き顔であつたのに引き較べて、老哲人の方は「象」と云ふ綽名にさも相應はしく、物事に無頓着な狡猾な圖々しさを顔に彰しながら、

「アキレス殿。あんたはまた餘り無考へな事を仕出かしたぢや御座らぬかなあ。それぢやまるであんたを危険にさらけ出したも同然ぢやて、まるで惡戯小供が水車に手を出して、水車がぐるぐ廻りだしたものだから、急に空怖くなつて駈け出して來たやうなものぢや。」

と云ふと、アキレス將軍は、

「いや。僕を誤らせたのはあなたぢや。私の立場は云はゞ船の船長のやうなもので、無論航海に出るために纜を解くとらなの決心はして居るが、しかし雲行きとらなの具合が氣にかゝらむわけには行かないぢやないかね。」

「さう云や、そうぢや。だが、アキレス殿。その警戒位は始めつから氣附いて居なきやならない筈だ。いやしくも王の寶冠に手をかけると云ふ仕事であつて見れば、手落ちがあつてはならない。」
「シツ」とアキレス將軍はあたりを見まはしながら「あんたと僕との間の極祕のことだ。誰か盗み聞きでもして居るものがあつたら大變、用愼は何處までも堅固にして置かなくてはなりません。茲で會つて居ることをブレニウス殿にでも悟られたら、それつきりです。」

「發覺したらもとより俺達は絞首臺の露になるのぢやが、發覺のないやうにしさへすればよいではないか。」

「だが用愼は何處までも堅固にせねばならずと申すのです。」

「だが用愼と惡戯小僧の臆病とは違ふ。」とアゼラステス。

「壁に耳ありの譬へもあり。」とアキレス將軍は聲をおとして「昔、暴虐王デオニシウスはシラキユウスの牢獄に壁に耳を備へたと云ふぢやありませんか。」

「その耳のあつた牢獄は、今シラキユウスの都では小間物屋になつて居る。」と老哲人は這處ところにまで物識り振りを發揮して「ぢやが、その昔の耳が此の廢墟にまでも備えてあると君は思つて居るのかね。マサカ。」

「兎に角、用愼し過ぎて悪いことはありません。」

「そりやまあ結構ぢや。足下も此の帝國の寶冠を狙ふと云ふ大野心を抱くにおいては、飽く迄も用愼堅固に心掛けるがよい。ところであの皇儲と定まつて居るブレニウスだが、何しろ王位は自分のところに轉げこむものと信じて、露疑はないのだから、それは當然のこととして實際にそれを確めて置くと云ふ事はせず、今は一心不亂になつて、あの荒馬の様な美人の騎士の心を得やうと焦つて居る醜態だ。しかしあの女騎士も凄いのぢやなあ。身體と服裝の一部分こそ女だが、その氣骨も、腕前もまるで男、いや男どころぢやない怪物の様なものだ。」

「ウム。あのロバート伯とかの妻ですか。昨夜ソロモンの獅子を粉微塵に碎いた勇士の戀人でせう。あの女が相手だつたら、ブレニウス風情は蝗より弱い。」

「ところでブレニウスは、飽くまでも自分の美貌に自惚れがあつて、今まで希臘の乙女たちを誘惑した手管で、あの女騎士にかゝらうとして居るのだから面白い。」

「それに自分が皇儲であると云ふことが思ひきつて、鼻にかゝるのだから始末に終えぬ。」

老哲人アゼラステスは一寸考へて居たが、

「わしは暫くすると、一寸あの女騎士に會ふ手管にして居る。おそらくあの女騎士はブレニウス

の甘つたるい言葉を鋭く拒絶してしまふであらうと思ふが。」

「そこでブレニウスは屹度と。」アキレス將軍も考へながら「屹度、貴殿に何かよい智慧は無いかと相談を持ちこんで来るに違ひないと思ふが……」

「そこちや」とアゼラステスは得意さうに「そこにこちらが乗ず可き機會が自然と湧いて来る。かうして皇儲のブレニウスが戀の盲目、いやまるで氣狂者の様になつて、心をすつかり女騎士の方に奪はれてしまつて居る間に、こちらの計劃は氣附かれる事なしに、どし／＼と運んで行くことが出来る。その邊は矢張り多年の老巧と云ふこともあり、此の儂が一切うまく仕組むで見せる心算ぢや。第一女騎士を取扱ふ上にも、儂のやうな老耄れが一番の適任なわけではないかの。儂の方はこれでよいが、足下は戰斧隊の方をいざと云ふ場合、こちらの味方として働かせるだけの準備は充分に出来ましたかい？」

「戰斧隊の方はまだ充分とまでは行かないが、」とアキレス將軍は答えた。「僕の手近にある五六十名だけは明白に納得させたから大丈夫だと思ふ。でいざ皇儲のブレニウスが失脚したとなれば無論戰斧隊の全部は此のアキレスの味方となるのは必定のことだ。」

「ところで、どうだね。あの一番の信頼すべき勇猛なヘレワードは？」と老哲人は念を押した。

「いや。あの猛者にはまだ何とも云はずに居る。」とアキレス將軍「あの男が戰斧隊のうちでは一番人望があるのだから、あれさへ動かせばよいと云ふ段取です。で僕はあの男を特別にプラカナルの牢獄の番人に追加して、ロバート伯の方を警戒させることにして置きましたが、何しろあゝした猛者のことですから、萬一ロバート伯とわたり合つた際には、どちらかゞ殺されるに決まつて居ります。もしロバート伯の方が殺された場合、十字軍がそれを楯にとつて戦端でも開くと云ふ形勢になれば、幸ひ戰斧隊はフランク族に對して、反感を持つて居るのだから、私怨に過ぎないと云ふ口實で、彼を敵陣にわたせば事済むと考へました。こんなわけで戰斧隊の方も大體に決まつたと云ふものですが、愈々皇帝を……は何時何う云ふ手段にしたらよからう？」

「その點に就いては、ブレニウスの意見も聽いて見ねばならぬ。もつともあの自惚れ男は、今日これから受ける幸福の方に有頂天になつてしまつて居て、明日の豫想は何も持つて居ないかも知れぬ。儂の考へでは何れにしても明日が現皇帝が玉座にある最後の日になる様に思ふ。」

「それを實は僕ははつきりと知りたい。四方遠近に屯在して居る味方のものたちに、いざと云ふ際、一齊に立つて行動が出来る様にせねばならぬ。何よりも機敏が第一だから。」

「それも無論、儂がブレニウスに會見をすると、一刻もはやく貴殿に知らせるから御安心あれ。」

それから、之れは別に貴殿の御意見を聽いて置かねばならぬ事と思ふが、あのコムネア姫なあ。ブレニチスの妻は何う云ふ風に處分したらよからう。」

「さあ。何處に置いてもよいものだが、もうあの歴史の物語りは聞かむでも済む様にして貰ひたいものです。あの文學だけは日頃から悩まされたものでしたなあ。あの扼介さへなかつたら姫の身の上位は此のアキレスが何とか心配してもよいと思つて居るのだが、何れにしても姫にも、もすこし自惚れの鼻を折る様にしくは。」

二人の話は之れで終つた。アキレス將軍は始め程の沈鬱な顔もすこし明るむで、意氣のあがつた態度で立つて行つた。

その後姿を見送りながら、老哲人は輕蔑の微笑を浮べて、

「あの男も餘程な間抜けだ。智慧の眼がないから、自分で掲げた松明で、聽て自分の身が燃え爛れて行くと云ふことも知らないで居る。あれで自分では一通りの智慧を働かせて居るつもりなんだらうが、いやはやまことに笑止なことだ。あんなやくざな智慧で、それでも自分ではあの傲岸不遜なニセホラス・ブレニウスを出し抜いてやるやうな心算で居るのが眞實滑稽だ。よしんばそれが出來ても、もとよりあの男の智慧からでは無く、尙ほ更彼の勇氣に依る筈も無い。またアン

ナ・コロネア姫だつて智慧の權化の様な女性だ。あんな他國から來た流浪ものゝ、想像力も創造力も微塵も無い、馬鹿將軍に左右される様な代物である筈も無い。あの姫のほんとの相應しい配偶としては純粹な希臘の血が脈管に流れて居る人間で、しかも羅馬が眞に偉大で希臘が眞に華やかであつた時代に教養を受けた人格でなくてはならない。またあんなやくざな將軍が玉座に座し得たところで、何處にその皇帝らしい稜威があらう。」

と獨り言を云つて、得意な自分の立場を考へながら、立ちあがつて三四歩あるきだした。そして狡猾な眼付きで、あたりを見まはして居たが、何か思ひあたつた様な風に立ちどまつて、「だが、コムネア姫が後の位につくには、現帝アレキシウスの崩御と云ふことが條件なのだから……普通の人死ならば別段世人も詮議立てまではすまいが、あの歴史家で哲學者であるコムネア姫が玉座について、あの鋭い史眼にかけて物を見貫くと云ふ場合が萬一無いともかぎらぬ。注意はあくまでも綿密にしなければならぬ。」と云つて、また涼亭の方に行き、「オイ。ダイオゼネス！」と黒坊奴隷の名前を聲高く呼んだ。だが黒坊奴隷がその聲をきゝつけて來るにはすこし時間がかゝつたので、またもや老哲人はつゝみきれぬ自分の得意な豫想を唇に漏らすのであつた。昔の聖像も、まづ天に向つて謀つて見よ、と云ふことを云つて居た。天に向つて恥ぢない方法で現

皇帝を無いものにする手段はいくらでもある。嚴密に云つて、その血はよしむば儂の手を穢し得るとしても、儂の額までも穢さむでも済む。」

と云つて居るところに、黒坊奴隷のダイオゼネスがやつて來た。で老哲人は、

「あの女騎士をうまく運びこんだか？」

と訊くと、黒坊奴隷はうなづいた。で、

「どんな模様だつたか？」と重ねて訊くと、

「御命令の通り、先づ先づと云ふ首尾で御座りました。あの女騎士は何しろ良人と別れさせられて、此の宮殿に残される様になつたことを酷く無念に思ひまして、散々に宮殿の奴隷達に當り散らし、五六人の奴隷は殺されてしまひました。ほんとに驚きいつた偉い亂暴な女もあつたものです。で御座いますが、私を見ますと、すぐ見おぼえて居て呉れましたから、私はあの女騎士にこちらの涼亭で、一日御ゆつくりなさいますやうにとの且那様の御言葉の通りに申しますと、あの女騎士も自分の良人を自由にする力は、且那様にお在りの事を信じましたと見えまして、私の言葉通りになりました。と云ふわけで、今ちやんとあのシテリアの祕密の涼亭のなかに連れ込んで置いてあります。」

「それはそれは結構に取り運んで呉れた。さすがにお前だけある。」と老哲人は黒坊奴隷を褒めた。

「全くお前の忠實な心でなくては出来なかつた仕事ぢや。有難う。」

ダイオゼネスは叮嚀にお辭儀をして退いた。そのあとで老哲人はまた「だが、あの黒坊奴隷は剛巧なだけにまた心配にもなる。あの奴隷にはあまり多く儂の祕密を知らせ過ぎた。危険な事ぢや。飽く迄も警戒をせねばならぬ哩。」

丁度此の時、涼亭の入口の處に据えてある怪像の手が、三度動いて妙な響をたてた。之れは來客のあるしるしである。

「あの手が三度動けば一味の仲間のものに違ひない。誰だらう。此の時間に訪ねて來るとは？」と云ひながら老哲人は、自分の杖でその像をたゞいて、暫く待つて居ると、皇儲のニセホラス・ブレニウスが希臘式の最も華麗な盛装で、美々しくたゞひとりでやつて來たのであつた。早速老哲人は、

「殿下。よくこそお出下されました。」と平生よりは嚴肅な澁い顔を、わざ／＼して云ふのであつた。「殿下の御様子で御察しいたしますが、あの女騎士のことに就いて、さぞお考へなほしのこと

も御座いまして、その相談に御出かけ下さいましたで御座りませう。ですが殿下、あの女騎士についての事は、われ／＼の計画が一通り首尾よくかたが附いてからの後まで、延して置かうでは御座りませぬか。」

すると殿下は頗る傲岸な態度で、

「老哲人。何と云ふ事を申すぞ。一度決心した此のプレニウスの決心が、どんな事情のもとにだつて更へられると思ふか。乃公の言葉は倫言も同様だ。まだ計画とやらを實行する前に、乃公は第一に此の事をやつてのけねばならぬ。諺にもビーナスの心は戦神マルスの働きによつて得られると云ふ事があるではないか。先づ美神ビーナスの心を得るために根かぎりの働きをせねばならないぞ。乃公はあの女騎士のやさしい腕に抱かれなくては何の力も出ぬぞ。」

「殿下。どうぞ拙老がおさからひ申す言葉も、よく噛みしめて聞いて下され。殿下は今まことに大切な計画の前に控えての事で、此の希臘の運命は、殿下の御生命ももろとも、間一髪のところにあります。それもみなあの女騎士の心一つに懸つて居るわけで御座いまして、あの女騎士こそは全く軍神と女神との半分々々の大傑物、そして此の大傑物の心がどちらに動くにしても、われ／＼の計画を根抵から覆すだけの力を持つて居ります。あの女騎士が殿下のお望み通り殿下

に靡きましますとしましても、そしたらば殿下を新しい愛人として、一刻も殿下を自分の傍から離さず、殿下を決して此の危険な計画に御加へする様なことは御座りませぬ。また萬一殿下の御心に靡かず、殿下に對して双向ふが如き場合となれば、今までにさへあれほど血腥い厄介をかけたあの豪傑の女騎士が、此の上どれ程な凄いことをし出かすか空怖しい程に御座ります。

「馬鹿な。何と云ふ老耄れかただ。お前はまたどうしてその様な愚鈍になり果てたのだ。お前は他の事では古今に絶した深遠な智識を持つて居りながらも、最も知らねばならぬ、最も美しい此の神祕な情懷にだけは、何故またこれ程な白痴だ。乃公の此の現在の飛ぶ鳥も落すばかりな威勢と地位とからでも、あの女騎士が乃公を拒絶したらどんな結果になるか位は察しがつく筈ぢや。さあ、アゼラステス。はやく取り運んで呉れ。もう、あの枯れた檜の木の不吉な鴉の様にがみがみ理屈等をならべることはやめて呉れ。それよりか女の心を得ない位な人間が何んで天下を得る事が出来るかと云ふ微妙な眞理を掴むがよい。さあ、はやくそのシテロスの神祕な涼亭とかに匿してある女騎士に會はせて呉れ。その神祕な道を教えて呉れ。」

と猛々しい勢で迫るものだから、老人は何處かに粧つたやうな澁い深い溜息を漏しながら、

「殿下の御意とあれば致しかたも御座りませぬが」と絞り出すやうな聲で返辭をしながら愚圖々

々とした態度を見せた。

それをもどかしがつて、ブレニウスは大きな聲で、

「オーイ。ダイオゼネス」と黒坊奴隷を呼びつけた。「お前を呼ぶだが一番手つ取り早い。さあ秘密な道を案内せよ。お前が此の希臘中で一番の伶俐者ぢや。」

聲に應じてやつて來だ黒坊奴隷のダイオゼネスは皇儲殿下の顔と老哲人との顔を見較べて居たのであつたが、老哲人が殿下の仰せに従へと云ふ意味の目くばせをしたので、ダイオゼネスはすぐと蔦の巻き繁つて居る廢墟の壁のところに行つて、その繁々とした蔦蔓の葉をわけだした。するとそこに奥まつた一つの扉があらはれ、その扉の前に石がいつばいつめてあつたのを、とりかたづけた。老哲人は黒坊奴隷に、

「ではお前に此の入口の番は任せて置くよ。たとへ生命をとると云つても、誰も此のなかにはいらせてはならぬ。此の時間に此の秘密の扉を開いて置くのは實に危険極まることぢや。」

忠實なる黒坊奴隷は手で自分の腰劍サベルを撫で、そして額を撫でた。之れは其の當時の奴隷が死も惧れず主人の命令を守ると云ふ最上の忠誠を示す禮儀であつたのである。そしてダイオゼネスは小さな提灯に火を點じ、更に内側の木の扉をあける鍵を衣囊から出して、一步すゝむで、皇儲の

下の前に恭々しくさゝげたのであつた。

「ダイオゼネス。乃公の顔を照らすよりは、鍵穴を照らして呉れ。あとでよく蔦の葉をつくらつて置くことを忘れるな。」とブレニウスも上氣嫌になつてゐた。

黒坊奴隷はブレニウスに提灯を渡して置いて後ろに退いた。老哲人のアゼラステスは、しばらくの間皇儲殿下の案内をして、その暗い狭い道をくゞつて居たが、ある處まで來ると不圖立ちとどまつて、

「こゝの先きがすぐとシテリアの涼亭の庭になつて居ります。此の先はどうぞ殿下御自身で獨り御出になつた方が道もよくわかります。それに、おひとりの方がよろしからうと御察し致しますて。」と云ふと、

「いや有難う。老哲人。此の若やかな心持ちをよく察して呉れられた。」

十六

一方、プラカナル宮殿内の地獄牢のなかでは戦斧隊の最勇猛であるヘレワードと、十字軍の最勇猛であるロバート伯とがすくなくとも一時的に痛快な程氣持のよい共鳴をしてみました。し

かも彼等二勇士の共通點は、彼等がまだ知り得ない程に案外に深い或るものがお互に現はれないで居ると云ふ状態だ。ヘレワードの方の特質は勇猛な自然人が全く自然のままにつくらず偽らず全くの素朴のままで大膽不敵で實に綺麗さつぱりと恐怖と云ふ觀念が生れながらにして無いのである。どんな危険にだつて即座に飛んで行く。それに比較するとロバート伯の方は矢張り自然人そのまゝの勇敢と寛厚心と冒險を愛する心とを持つて居るがしかも華やかな騎士道場に育つただけあつて、現實的な一面に加へて頗る空想的なロマンチックな洗練されたところがある。一方が山から掘りだされたまゝの素朴な金剛石の璞ダイヤメントとするならば、一方は寶石屋の名匠にかゝつて磨きあげられた飾りの金剛石の様なものである。だから此の如何にも本質が同じくて、たゞ境遇が違つて居ると云ふだけの二人の勇者がブラカナル宮殿の地獄牢のながで遇然にも一時的一致をしてみつたと云ふ事は意味が深い。で、戦斧隊の最勇猛者は次第に打ち解けた親しい調子で伯爵騎士に話しかけて行つたのであるが、打ち解ける程度が進むと同時に、身分では全く氣のつかないことながら、言葉が益々自然にぞんざいに無禮講になつて行く。之れはヘレワードの心では實に無邪氣の骨頂であるのだけれど、伯爵騎士たるロバートの身分に對して無様である點はまぬがれない。特に最も粗野で無様だと思はれる點は相手の位階に對する觀念が全然缺除されてしまつて

居ること、フランク族の貴族にとつては、之れはすくなくとも不快の事であるに相違ない。勿論フランク族に限らず、ノルマン族だつてさうであるが、いつたい此の中世と云ふ封建時代に騎士道において特權的な地位を占め、尊大心を抱くに足るべき名譽の血統を有して居るものが、その對手からそれを藐視されてしまふと云ふことは如何にも我慢が出来ない侮蔑である。

ヘレワードは伯爵騎士に對して何等階級上の差別を認めると云ふ様な心持ちは無い。彼は寧ろさう云ふ點では今彼が奉仕して居るところの希臘帝國の富と權力との方を大切に考へて居るのである。彼はすくなくとも誠心誠意を以つて希臘の現皇帝アレキシウス・コメニウス陛下に對して忠勤を勵むで居ると同時に、その階下の直屬の侍臣として戦斧隊の隊長であるアレクス將軍に對する忠誠の義務をも充分に認めて居る。無論ヘレワードはアレクス將軍を卑怯な人だと思つて居り、何んだか腹黒い反逆者ではあるまいかとさへ疑つて居る。だが何れにしても戦斧隊の隊長たるものは、彼と皇帝陛下との間に横たはる大切な連絡物であると心得て居る。即ち彼はアレクス將軍を通じて現皇帝陛下に忠勤を勵むことが武士たるものの正當な道であると信じて毛頭も疑念を有して居ない。アレクス將軍こそはすくなくも戦斧隊を統率するの位置にあり、他の軍隊との調和を和つて行く地位にあり、且つ部下の勇敢程度をも認識し、ヘレワードの様な外國から放浪

して来た野武士は此のアキレス將軍を首將に持つた事が幸福であると考へるのが至當であつたのである。ヘレワードの心の持ちかたが斯う云ふ風である上に、彼は最近にアキレス將軍がいろいろ特別な好意を受けており、將軍に導かれて宮殿内にもはいることが出来、何とかして將軍の恩顧に萬一なりと酬めねばならぬと云ふ考へを抱いて居るのであつた。

だからしてわがヘレワードが、かく地獄牢のなかから伯爵騎士のロバートを救ひ出さうと決心するにあつても、勿論、ロバートを助けることによつて希臘皇帝陛下に對し大に忠勤を勵まうとするの心持ちから出て居るのであつた。無論彼の心持では、此の不當に取扱はれて居るところの伯爵騎士を正當に取扱ふことが、アレキス將軍の意志に反した行動であらうなどと云ふことは夢更思つて居ない。

で、ヘレワードは今や自分が思つて居るままにロバート伯を地獄牢から誘ひ出し、今は既によく心得て居るところの複雑な宮内の迷宮殿路然とした道を何等誤ることなく案内して、番兵など立つて居る處をも無事に通過して、廣々とした世界に出て来たのであつた。まことに坑を出で、天下の春光に浴すると云つた氣持がロバート伯の心には自らには湧いて和いで来たのであつた。でヘレワードは極くさつくばらんな調子で伯爵騎士にアゼラステスと云ふ老哲學者のことを知つ

て居るかと思ふて見ると、伯爵はどうもよくは知らない様な返辭をしたので、

「いや。知らない筈はないだらう。それとも貴殿は知らない風でもなさる心算かな。乃公は昨日貴殿があの老哲人と同じ食卓で食はれたのを見て居る以上、知らないとは云はせぬ心算だが。」とヘレワードが云ふと、

「ウム。あの物識りのお爺さんの事か。あのお爺さんのことなら別に知るも知らないもない、たゞのお爺さんぢやないか。何んだか半分仙人の様な、半分魔術扱ひの様なお爺さんだと思つた。」

「その上半分まへはん國戸師こくこで、全部悪虐無道な怪老人ぢや。」とヘレワードの語氣は急に鋭くなつて来た。

「あの怪老人は表面にはこゝとお機嫌のよささうな顔付をして、その裡に何時も他人の重大な罪を働かせる様なことばかりをたくらむで居る。七面倒臭いわけも判らぬ、哲學の文句を並べたて、宗教や道徳やから抜け出て居るやうに装ひながらも、實は悪魔の呼吸をなし、見かけはならびない忠義心の權化であるが、今のうちにあの怪老人を何とかして、片づけて置かないと、今に此の希臘帝國は取り返しのつかないことになりはせぬかと心配でならぬ。あの老人は此の帝國の禍の種と思ふが、貴殿はどう見られる。」

「君はそれほどあの老人を悪人と思ひながら、そのままに何故今まで放つて置いたのだ。」

「いや。その處だが、實は乃公にはあの老人の計劃が、まだすつかりと呑み込めないで居る。だが今に聰明なる現皇帝陛下はそこに御氣が附かれると思ふが、萬一さもない場合には、我が戰斧隊の斧にかけても、あの老人の天誅を見ずには置くない。乃公は貴殿が頻りとあの老哲人に感服して居られた様子を見うけたから、それで今注意して置きたいと思ふのぢや。」

「ぢやが拙者とその哲人の思つて居ることは何の關係もないではないか。」

「いや。大に關係があると思ふ。實はあの怪老人の一番の味方と思はれるのは、外ならぬ皇儲殿下であつて、無論、此の邊のことは貴殿はよくは御存じあるまいと思ふが、皇帝陛下は皇儲殿下よりもあの怪老人の方を、すつと重んぜられて、そのことが實は始終皇儲殿下のニセホラス・ブレニウス殿には御不満と云ふ事態ぢや。そしてその御不満が長い間のこんぐらがりから、妙な事には此の怪老人と陰謀を共にせられる様になつたのだが、このことは恐らくあの怪老人があまり宮廷内に自由氣儘に振舞へるところから、富のあるのに任せ、皇儲殿下の御機嫌をとつて、盛に媚びた揚句此の様なことになつたであらうと思ふ。人の弱點につけてむ事は實に巧みな怪老人であるからな。まづ第一にあの怪老人がやつた手管は、皇帝のお姫様である殿下の御奥方を嫌はせる様にして、皇儲殿下と皇族との間を遠ざけやうとした。しかし、ブレニウス殿が若し愈々姫君を遠

ざけるとすると、最早や皇儲殿下としての正當な資格が認められなくなることになるのぢやが、それはあの人が、此の老怪人の怪手腕に操つられた當然の酬みと見ねばなるまい。」

「しかし、その様な宮殿内の複雑は此の拙者にとつて何の關係もないことではないか。」と伯爵騎士は問ひかへした。「そのアゼラステスと云ふ怪老人の心がどうであらうとも、その仕へて居る皇帝のアレキシウス・コメニウス陛下は、拙者の仕へて居る皇帝でない以上、拙者がその問題に割込んで行くと云ふ理由が立たないではないか。」

「いや。さう思ふとは貴殿は武士にも似合しからぬ。此の陰謀の爲めには何千何萬の人々いや希臘全體の正義が潰れる……」

「たとへ何千人が死なうとも、要するに僅か餘所の宮廷内のごたごたに過ぎないではないか。その様なことは此のロバートの心にはあまり響かぬ類のものぢやわい。よしんば此の希臘の全民族がこぞつての願望であるとして、眞の騎士の心はその戀人の髪の毛一筋の色が銀に變つた程にも響かぬ。」

「流石に貴殿は騎士の魂だ。天地が崩るゝとも戀人の爲めならば動ぜぬその確固とした度胸には乃公も惚れ込んだ。いや、此の希臘にはおそらく貴殿の魂に共鳴する幾多の味方を得られること

であらう。」

「その様な話は暫く止め置いて、何處かもつと人眼のつかぬ静かな隅の方にも行かうではないか。そうしてそこでしつかりと相談をまとめて、二人相たづさへてその亂麻の様な宮廷内のごたごたのなかに斬り込んで行くのもよからう、すれば或はブレンヒルダの姿にも行きあたるかも知れない。」

「いや。そこはよく考へて見ねばならぬ。一度刃を抜けば四圍は悉く敵。無論乃公は貴殿の爲めに戦ひ抜いて死ぬのを不足に思ふものではないが、貴殿の戀人ブレンヒルダが手籠めに會つてその名譽が穢されたとすれば、何の役にも立たないではないか。此の希臘宮殿は狭しと雖も、尙ほ貴殿と同じ心のもも多く、ブレンヒルダを再び貴殿の手に返し、勇ましく貴殿を十字軍の陣頭に立たせて見たいと思ふものも數あるに。」

「よく言つて呉れた。拙者が間違つて居たのかも知れない。いや全く間違つて居た。だが今君の言葉に、かりにもわがブレンヒルダが手籠めに會つて居るとか穢されて居るとか、心あらば此の心を慄立たせないで、はやく實際を話して呉れ。」

「ブレンヒルダの居られるのは、茲からあまり遠くもない、あの怪老人の屋敷のなかにあるシテ

リアの秘密の庭だとの事です。あの老哲人がその秘密な庭に行くには、秘密な近道があるのとことだが、乃公は迷ふといけないから廻り道だけれど、乃公の知つて居る道で行かうと思ふ。あの怪老人は實に變な趣味があつて、宮殿のなかと廢墟のなかとを毎日交るがはる抜け道で往來をして居る。」とヘレワードは語つた。

「その秘密の庭とは何處だ。すぐ其處か。」とロバート伯は氣色ばむだ。「たしかにわが妻ブレンヒルダはその秘密の庭に押し籠められて居るのか。」

「たしかに昨日からその庭に居る。昨日乃公は五六人の仲人と一所に、貴殿の妻とブレニウス殿下とのまはりを警戒して居たのだが、ブレニウス殿は、貴殿の妻を惚れ惚れと見て頻りと褒言葉を云ひ續けて居たが、貴殿の妻の方はぶりと愠つてばかり居た。それも矢張りあの怪老人のアゼラステスが海千山千の狡猾い智慧を絞つた結果であらうと思ふが、ブレニウス殿に媚びたいばかりに、貴殿等夫婦をわざわざ十字軍から誘ひ出して、貴殿の妻だけは、之れまでも度々あつた例だがあの秘密な庭で淫らな不義な快樂をさせ、其の間に貴殿だけはあのブラナカルの地獄牢のなかに籠めて猛獸の餌にでもしてしまはうと云ふたくらみであつたらうと思ふ。」

「何？忌々しい。何故貴公は昨日それを知らせて呉れなかつたか。」

「昨日の乃公は貴殿を不具載天の敵だと思つたから、實は貴殿にそれを知らせるも知らせぬもこちらの勝手だ位に思つて居た。それは赦して貰ひ度い。昨日の敵が今日の友となるまでにはいろいろな變化があつたが、今となつてはお互に友達となり得たこのいきさつを、有難く思ふばかりだ。」

さう云はれて見るとロバート伯も、たといその時の發作的の慄々した氣持ちは、手當り次第に當り散らさねばやまれ相も無いのであつたが、對手の言葉の道理を領かないわけには行かなかつた。

二人の足はだん／＼に運はれて、老哲學者アセラステスの例の埃及寺院の廢墟そのまゝとりいれた庭の入口のところまでやつて來た。庭にはいる扉は固く塞かれて居るのであつたが、ヘレワードにはいり得るだまけ自信があつた。と云ふのは彼はアキレス將軍とアセラステスとの間の秘密の合言葉をすこし心得て居たからであつて、勿論彼はまださう云ふ機密なことまで知ることはゆるされては居なかつたのであるけれど、それを聞きおぼえて心得て居た。それにヘレワードと云へば誰も疑はない顔役で、少々位合言葉が不完全であつても、番人がそれを咎めだてする程でも無いと思はれた。と云ふわけでヘレワードと伯爵騎士とは、その老哲人の庭をとりまく高い

塀のたつた一つの拱門の前に立つて扉をどんと一つ荒く叩かうとしかけたのであつたが不圖考へが浮かんだ。

「——若しあのダイオゼネスと云ふ黒奴隷が門を開けにでも出て來たら大變だ。彼はすぐと飛んで歸つて注進するに違ひない。あの黒奴隷は今までに悪いことばかりした、罪業の深い奴だから此の場に殺してやつて差し聞えの無い奴。」

「ぢや。貴公がすぐ殺してやれ。」とロバート伯「貴公の方が奴の境遇に近い、拙者は奴隷殺しで祖父のシヤレマンの名譽を汚し度くも無い。」

「いや。それは貴殿が殺さねばならぬ。乃公は他の奴等が駆けて來た際に手だしをすることにするから。」

「大勢が來たら拙者の方が適任だ。大勢ならば大丈夫ひきうけたら貴公は安心して黒奴隷を殺されるがよい。」

「それは安心せないでは居られぬが、しかし階級と云ふものは變挺なものぢやなあ。自分の身を護るにも對手を殺す場合にも、先祖の名を引つぱり出さねばならぬとは、面倒過ぎた厄介だと思ふ。」

「厄介でも面倒でも、それが騎士道の嚴肅な禮儀ぢや。たゞし戦ふか否かとなれば、否とは武士の身で云へない以上、今は貴公が先づ戦はねばならぬ順序ではないか。」

「それは恐れいつた。では乃公が扉を叩くとするが、ハテ、どんな奴が現れ出づるかな。」

と云つてヘレワードがドンと叩いて響かすと、大扉は内側にすこし開いて、倭人の様な黒坊女が顔をのぞき出した——その眞白な髪が黴い醜い顔の色と對照されて、しかもにつと聲も出さずにだだつびろい様な黒坊に特有な笑ひ口をひんまげた。その表情は精しく云ふなら慥かに悪心を藏して他人の悲惨を歎んで快樂の眼で見ると云ふ趣きがある。

「アゼラステス老人は居られるか。」とヘレワードが云ふと、その魔女の様な黒奴婦は黙つたまゝで奥の方を指したのであつた。

でヘレワードと伯爵騎士とはその方に向つて進むで行つたが、その間に魔女の様なかの黒奴女はヘレワードの耳に極々小さな聲で、——あなただけはおはいりになりましたも御とがめをお受けになりませんか、他に御連れがありますのは心配でなりません——と云ふ意味の言葉をさも心配らしく私語いたのであつた。

ヘレワードは、何、大丈夫だと云ふ意味の表情を黒坊女にして見せて、間もなく奥の方にと口

バート伯と共に姿を消してしまつた。そのあたりには蒼鬱と樹木が茂つて居て、熱帶的な枝の垂れて重なつた蔭が、紆曲した徑を巧みに匿して居る。さながら迷宮の様で、ところどころに大型な珍奇な花朵が豊艶に瑞葉の間から垂れて居る。眞晝の森閑とした空寂な氣分が滲つて、枝をゆるがす微風も無く、鳴き聲をたてる禽鳥も居ない。

ヘレワードは微かな私語で、伯の耳根に、

「此の邊は最も注意して靜かにせねばならぬ。此の邊こそ乃公達の狙つて居るあの鹿どもが、匿されて居るところですぞ。乃公の方がまつさきに行つてよく見届けて来るから、貴殿はしばらく樹蔭にかくれてすこし氣を靜かにして居られるがいゝ。あの徑の樹の蔭が屈強の處かも知れぬ。たとへどの様なことが起つても、俄かに飛び出したりなどは慎むで下され。もしブレンヒルダ殿が靡かれたとなれば、あの怪老人が屹度あたりを見まはつて居るに違ひないから。」

「なんでブレンヒルダが。」とロバートは思はず聲をだした。「わが武道の女神は、左様な苦しい恥を此の騎士に與へる位なら、いつそ死ぬ方が……」

と云ひかけたが、靜かにせねばならぬ絶對の必要は感ぜざるを得なかつた。伯はちつと我慢して聲を嚙み込むで、様子を見届けに出て行く、ヘレワードの後ろ姿を熱心に見入つたのであつた。

檜の樹の蔭から一足出て見ると、今しもヘレワードは、すつと向ふの茂みの間から涼亭の館らしいものが見えるところまで進んで行つて、その建物の小さな小窓をそつと覗き、それから耳をあてゝ居た。丁度その場所はうまく垂れて繁つた、何やらいろ／＼の美しい花が澤山咲いた枝が、ヘレワードの身を蔽つて居て、こちらの方からは向ふの様子を覗くことが出来ても、向ふからは全然に遮られて居るのであつた。その様子を見ても今何事かヘレワードの心を曳く事柄が、その建物のうちに起つて居ると察せられる。はやくその事をヘレワードから聞かして貰ひたいとロバート伯の心は身を拗められる様に苦しかつた。

で伯は寔音をたてずそつとしのび出て、枝垂れた繁みをかきわけてながら、ヘレワードの傍らによつた。その動作の物音一つたてぬ静かであつたことは、忍びよられたヘレワードさへ気づかず、僅かに肩をそつと叩かれて驚いて、ロバート伯の顔がまぢかにあるのを見たくらいであつた。

最初ヘレワードは肩を叩いたものは何者かと、燃えたつ燠の様な眼で鋭く見かへつたのであるが、ロバート伯と気づくと、肩をそびやかして、恰も伯の自制し得なかつた焦慮をあはれむものの如く、そつと伯にも覗く餘地を興へたのであつた。見ればその建築物の内部は流石にシテリア殿秘密の歡樂の場面だけあつて、なまめかしい優美な裝飾ばかり施してあり、澤山の肉感的な立

像や繪畫やが並べたてられて居る。聴て間も無く、扉が開いて奥の方から伯爵夫人のブレンヒルダが侍女のアガタを伴つて出て來た。ブレンヒルダはすぐと其處にあつた長椅子の上に身を投げかけると同時に、美しい顔をした若い侍女のアガタは、伯夫人の後ろの方に、こちらにはその姿は匿れる様な位置だつたが、つゝましまやかに蹲いて侍つたのであつた。伯夫人は、

「アガタ。お前もさぞやあの白髪のアゼラステスと云ふ爺さんの腹黒いには愕いたらうね。それからあの皇儲殿下とか云ふブレニウスの影辨慶なのにも呆れかへつたらうね。」

「ほんとに奥様。ここは何と云ふ虚偽ばかりの宮殿で御座りませう。あの白髪の爺さんが親切と云ふは憎悪にくしみのこと、そしてあのブレニウスが寛大だなど申すことは、全くうらへらの奥様に對する忌はしい心で御座います。」

「何と云ふ穢はらしい。自分の身にその勇氣も資格もないのに、此のわたしを弄ばうとは。――

あゝ、私の眞實のあの崇高い騎士は――わたしが今こんなにも囚はれて居ることをすこしでも察して呉れて居られるか知ら、早くまつしぐらに突き破つてわたしを救ひに參られさうなものだに。」

それを蔭から聞いて居るヘレワードはぐつと伯爵騎士の腕を抑えた。伯爵騎士は、「貴殿は人間か。此の有様を見てなほ乃公に靜かに忍べと云ふのか。」

「乃公も人間、貴殿も人間ぢや。たゞ乃公は今押しとどめる人間になつて居るだけだ。しかも乃公たちはみんな合はせても人間二人に過ぎない。あのブレニウスが一口の口笛を吹けば倏ち何千の武士が集まつて来るから、如何に乃公達が勇猛であらうとも——さ、靜かに。靜かに。乃公は命が惜しいではないが、無鐵砲が役に立たぬ位は心得て居る。アレを見給へ。貴殿の妻のあの美しいあの貞淑なことを、乃公達が今茲で、大死をしたとてあの美しい人の生命は助からない。」

一方伯爵夫人ブレヒルダが侍女のアガタに向ひ「わたしは最初あの白髪の爺さんに欺かれて居た。あんなに道徳家らしく、學問が深くて、眞面目くさつた顔付を、よくもあの狡猾な魂が装つたものぢや。だがあの怪老人がわだしを皇儲シイゲルにひきあはせた時から、その底意がわたしにはすっかり讀めた。だが、智慧で騙しあふなら、わたしも、何の、敗けないつもり、わたしにもいつぱしの巧みはある。」

「あれを聞いたか。」とヘレワードは伯爵騎士に私語く、「あの美しい顔で、深い智慧の巧らみが張られて居るのぢや。今貴殿が狼狽ウツクシたことをすれば、その巧みな智慧の網を破る様なものだ。心しづかによい時機を狙ふ外はあるまい。」

「口惜しい。」伯爵騎士は齒ぎしりをしながら、「だが、貴公は此のロバートがよもやあの偽哲人

と馬鹿な皇儲シイゲルとに怨恨ウツクシの一撃を與へないで此の場が退けるとは思ふまいね。——と、此の邊からすこし伯爵騎士の激した聲が高まつて來たので、ヘレワードは思はずその力のある掌で伯爵の口をおさへつけた。で伯も氣を鎮めながら、「察して呉れ。」と漏らした。

「察する。」とヘレワード「一度戰斧を拂ふ時機とならば、何のかんのと容赦はせない。」

之の言葉で伯爵の心持は稍落ちついた。ヘレワードの意氣に大に感ずると云ふ氣持ちで黙つてしまつた。此の時さら／＼と物の響がして、伯夫人ブレンヒルダは耳を敬てた。そして「アガタわたし達はまるで道場で武術の仕合でもする様な心持ちとは思ひませぬか。さあ。よい敵御さんなれ。こちらに控えて待ちうける事にしやう。」と云つて、此の二人の女は、ずつと後ろ側の方に退いて行くと、丁度皇儲とアゼラステス老人とが扉をあけて這入つて來たが、彼等はブレンヒルダの言葉の終りの方を聞いたらしく、皇儲がつぶやく様な聲色をつくりながら——よい敵そこに待ち受けられたか。美しやな。敵の姿もあらはれないのに好敵手御參なれとは、いさゝかお待ち遠うであつたと見える。アゼラステス。今度こゝは花も實もあるよい取りくみ、卿おんみのその齡としの劫がも乃公の巧みには及びかねたか。齡はとるまいもの、年齢と云ふやつはなかなかの嫉妬やまやきで愛の天使の翹をもぎとらうとしたと見えるな、粹のきかない老人ほど哀れなものはないわい——。

「いや殿下。さうでは御座らぬ。」と老アゼラステスは皺顔に媚の笑ひを漾えながら「愛の天使の翅を挽がうとしたのではなくて、實は分別の手が、同じ調子で長く續くやうに荒羽根をすこしとつて見ただけで御座ります。」

「だが、アゼラステス、何れにしても愛の天使の扱ひやうを知らない無粋の毀はまぬかれまいぞ翅を挽がうとしたに變りはないではないか。」

こんなことを云ひながら皇儲は無数の寶玉に目も綾なほどギラ／＼と輝く自分の盛装をかへり見た。身いつばいに繋いである純金の鎖、腕環、指環、それがまた此の贅をつくしたシテリアの秘密の涼亭の光景に至極に相應しく、自分が特別な美男子であることが殊更に引き立つて自惚れることが出来た。それをアゼラステス老人がつくづくと見呆れて、

「今日の殿下の御服装は古今の歴史にも類例のない美しさで御座ります。儂の家では累代持ちぐされの寶玉ですが、今殿下の爲めに眞にそれ等が寶玉らしく纏はれましたと云ふ事はどの様に寶玉にとつても本懐のことに御座りませう。此れ等の寶玉全部は、我が家の家寶として傳はつたもので御座りますが、今日の此の日と云ふ晴れやかな美しい情景に用ゐられた上は、殿下の御たのしみの悠久無限を壽ぐしるしにまで悉く殿下に獻上いたしまする。」

「それまた有り難すぎて辭退がしたい程ぢや。」と皇儲も悦にいらながら、「まことに卿の言葉通りに老哲學者と云ふ肌につけられたら泣きさうな立派な寶石ばかりぢやなあ。學者の眼に映つては寶石もたゞ、紀念の記憶と云ふ値しか無いであらう。例えばそれ此の大きな印形のついた指環は——そう。昔ソクラテスが持つて居たとのことぢやが、その因縁はまことに有難くも深い。だが卿の哲學にはクサンチツベの試験はあるまいな。それから此の衿止、これも昔の美人フィリネの胸を飾つたとの來歴、それを今此の皇儲にかけて、昔のダイオゼネスとは正反對の粹な用向をとめる。それから此の控子——これもまた——」

「そのあとちよつとおつまりと云ふところですか——いやなに、殿下の頓智は今にいくらでも御試しになる時が参ります。」

「これからいろいろと卿から頓智を使ふことを學ばねばなるまい。」と云つたが、此の時ふいと奥の方から伯爵夫人のブレンヒルダが出て來たので「イヤ。是れは丁度よい處に。」

と云つて皇儲は此の上もなく丁寧に禮儀正しくブレンヒルダに一揖して、自分の寶玉の燦然とした盛装を見せびらかす様な態度をとり、そしてづかづかと伯爵夫人の前に近づいて行つて、

「敬愛する淑女としてのあなたに、わたしは今申しわけがあつて参りました。多少貴女の意に反

して此の宮殿にお留めいたし、此の様なところに貴女をお置き申した次第は。」

「多少ではない。全部私の意に反して居ます。私の意志は私の純真な夫である巴里伯爵ロバートと共に十字軍の旗を樹てた軍隊を率ゐて居たいと思ふばかり。」とブレンヒルダはきつぱりと云つた。すると老哲人は横あいから口を出して、

「無論それが、貴女が最初に佛蘭西から御出陣の時の御意志でありましたでせうが、ですが、伯爵夫人、こゝまでも來れば變るが道理とお思ひにはなりませんか。貴女が御出發をなされた國境あたりでは、僅かの行き違いから直ぐと戦争騒ぎが始まり、血腥いところでありましたが、此の希臘帝國全く平和を悦ぶ國柄で、人々の幸福を増進させることばかり心掛けて居ます。御覽なされ、西歐の方では、自分の武術を鼻にかけて、その暴虐振りが他人を悲慘にすることが多い程偉い人だと尊敬されて居るではありませんか。それにひきかへ、こちらの此の平和な幸福な國では、美しい淑女と天才ある若者との爲めに榮譽の月桂冠を捧げ、愛の爲めに讚美の祝福を限りなく贈つて居るではありませんか。」

「ですが御老人。」とブレンヒルダは淑女の態度を崩さない程度に「あなたは私に歡樂の道を御説きになりますけれど、私が幼い頃から育つた國の掟はそれとは大違ひであります。私の生れた國

では、それとは正反對に、恰も雄々しい雌獅子と雄獅子の様に、女は男の武勇の程を實際に見なければ結婚は致しません。凡そどのやうな賤の乙女でありましても、まだ武道にかけて名譽を博せない男と結婚するものは天にも地にも面向けのならぬ恥しいこととして居ります。」

「しかし、果してさうだとすると、」皇儲ブレニウスは爽な聲で「貴女のお國では結婚と云ふ事は大變不公平なことになりは致しませんか。ただ一回の偶然な勝負で、どの様な野蠻人でも高貴な淑女の配偶になるといふことは、何と云ふ危険なことでありませう。それに危険と云へば自分の愛するものを刃のもとに試さうと云ふのはどうしても淑女の心とは思はれません。戦はずとも、優れて居ることが明白であるなら、淑女は慧くそれを見抜く可きであります。」

「それにまた。」と老哲人は皇儲の言葉に添えて云ふ「此の希臘の方にも武士道の魂は西歐の方に劣ることなく尙ばれて居ります。」

「それは私も聞いて居ります。」とブレンヒルダ「昔、有名なあのトロヤの圍みの戦でも、或る時卑怯者が勇者の妻を奪ひ去り、その勇者と正當な勝負をすることを百方手段をつくして避け、その結果は多く味方を無慘に犬死させ、その都を多くの富と財寶ともろ共に滅ぼし、遂には自身も卑賤なもののかゝつて仆れ世の物笑ひなつたと云ふ事もあるから、騎士道の魂のない

ものは此の希臘でも所詮は滅びることになるのでありませう。」

「いや、伯爵夫人。それは貴方の御聞き違ひぢや。」と皇儲「トロヤの昔の其の恥づべき物語りは亞細亞の賤民族が爲した事柄で、それを武士道で正したのが此の希臘の民族であつたのです。」

「貴方は學者で御座いませう。」とブレンヒルダ「しかし幾ら學者の言葉でも、わたしの夫の兜を眞正面に蹴まえても身顛いしないだけの希臘の勇士を一人今わたしの眼の前に御出しにならない以上わたしは承知が出来ません。」

「それは大した困難なことでも無い。」と皇儲はきつぱり云つた。「人の噂が乃公に對する媚びへつらいで無いならば、乃公自身でも、貴女に不當にも結婚し得た身の程知らずのあの狼藉武士の一疋位は捻り潰す力は餘り返つて居る。」

「それならば今すぐに。」とブレンヒルダは急ぎ込む。「まさかに殿下は、卑怯な策略でわたしから遠ざけられて居るわが夫を、茲に連れだす力が殿下に無いとは仰せられまい。わが夫の爲めならば鎧も兜も要らぬ。たゞ劍が一本あれば結構です。どうか此の部屋にわが夫を連れて來られて勝負をさせられたい。萬々一わが夫が身顛ひのひとつでもする場合があつたら、夫にかはつて此のブレンヒルダが勝負に立つてもよい。その上勝負に勝つたものに、わが身を委かせるも厭ひは

せぬ」と云つて、ブレンヒルダは身を再び長椅子の上に投げかけて、「あゝ恵み深き天の神、假りにも私が此の様な想像をするのは、神の御心を疑ふと同じく深い罪で御座ります。御ゆるし下さい。」

「その御言葉はまことに有り難い。」皇儲は實の様な言質を得た心持ちで「その御言葉ひとつで乃公のわだかまる胸はすつきりとした。勇者との評判あるバリ伯ロバートに打ち克つものならば、誰にも尊きブレンヒルダの愛を受けることが出来るとはよく云つて呉れた。天は既に此のブレニウスに無限の武勇と力量とを與へて援けて呉れたと云ふも同様、いや愚圖々々して居る時ではない早速勝負を急がう。」

影で聞いて居る伯爵騎士はヘレワードの耳に「あの卑怯ものゝ皇儲とやらが、乃公の劍櫛の響きにさへ顛えあがる程な臆病者の癖に、乃公が居ないとて、かほどまでに自慢し居るとは忌々しくてならぬ。あれで乃公の妻のブレンヒルダの意を迎えやうとするその心さまの卑劣さは、見て居て我慢が出来ないではないか。まだこれでも貴公は乃公に我慢をせよと云ふのか。ブレンヒルダもまた、なんであんなやくざ者には不相應にも過分な言葉を云つたものだ。今おれはすぐと此の場に飛び出して、あの影で威張る奴に目に物見せて呉れたいが……」

ヘレワードも心に瞋りながらも、ちつと我慢しとほす態度で「その心持ちは深く察するが乃公がついて居る以上、何もしないで、たゞ静かに理を考へて貰いたい。乃公と別れる時が来たら、その時こそ、貴殿の武者振ひを、どのどんづまりまで出して荒れまはらうとも貴殿の勝手ぢやが。」

「之れでも我慢しろと云ふ貴公は人間か。」いとロバート伯は輕蔑に類した眼付で對手を見ながら「人間は愚か、野獸の情でも持つて居るかい。どんな卑怯な四足獸だつて、その妻が虐げられて居るのを見て飛び出さないものは無い。牛なら角で屠り、犬なら牙をだし、馴れた鹿だつても狂氣の様になつて枝角を振りたてるではないか。」

「そりや獸類で無智だからさうするのさ。獸類の雌だつたら無茶苦茶に反抗するから、それで雄も凝乎とはして居られないが、見給へ。崇高いぢやないか貴殿の夫人の振舞は。一切連絡を絶たれてしまつた哀れな囚れの身でありながら、敵のあらゆる奸策をくゞり抜けて、あの貞操を嚴かに守つて居るとは。乃公はすつかり感服して神様でも眼のあたりに見て居る様な心持ちがする。此の世に是れ以上に完全な貞節がまたとあらうか。乃公も今にも戰斧で一撃やりたいのだが、あの貞操を見て恍惚として居る有様だ。」

「うれしい。心の友だ。乃公は有難いぞ。流石はブレンヒルダだ。貴公もあのブレンヒルダを見てそれほど悦んで呉れたか。如何にも勇者の妻らしい妻だ。乃公は乃公の心がすこしでも狂つたことが貴公に對して耻しい。」

「無理もない。——シツ靜か。何やらまた話して居る。」

見れば皇儲ブレニウスは怪訝な眼付きをしてあたりを見まはしながら老哲人に、

「アゼラステス。何處か近所で人聲が聲こえる様な氣持ちがするが……」

「いや。そんな筈はありません。」と老哲學者は云つたが、「でも一應調べて見ませう。」

老哲學者が歩き出したので、ヘレワードとロバート伯とは急いでもつと深い茂みの間に巧に身を匿しおゝせてしまつた。まるで死人の様に呼吸を殺して靜かにして居ると、その老哲人は重い足どりで、注意深くあたりを見まはして一巡したのであつたが、とうとう二人の匿れて居るところを發見しないで再び建物のなかに歸つて行つた。

あとでロバート伯はヘレワードに「乃公は生れてこんなに抑えきれない我慢を抑えつけた事は無いぞ。あの老ぼれの頭を一撃ちに斬りはなしてしまいたくてならなかつた。貴公だつてさうであらう。」

「乃公は我慢はもう馴れた。何うしても石の様に沈黙になつて、乃公達の身は兎も角だが特別にブレンヒルダ殿の生命が絶対に安全だと云ふ時機を待つて、その時此の憤激を鳴らすより外に道は無いではないか。」

「いや飽くまでも貴公の沈勇を有難く思ふ。乃公はいざ戦ひとなつた時、貴公を最も華々しい名譽ある場面にすゝめて、貴公の名を千載に輝かして見たいと思つて居る。」

「有難い。だが如何なることがあらうとも今黙つて忍耐して此のヘレワードの言ふまゝになつて呉れ。武勇を彰す時は遠くもあるまい。」

でヘレワードとロバート伯が再び黙つて聞き耳をたてゝ居ると、館のうちには誰も外で聞いて居るものは無いと安心して、語調は前ほどに高くはないが、尙ほ機勢のある聲で何か頻りと話されて居たが、聴て鋭いブレンヒルダの聲で、

「いくら殿下が知らないと仰つても信じません。殿下は必ずわたしの夫のロバートが居る處を御存じである筈、殿下の一言で囚れの夫の身はどうでもなります。人の妻に道ならぬ戀慕をするもの以外誰がその夫を捕虜にしたり殺したりするものがあらうに。」

「いや。それは大變な誤解です。」と皇儲「わしの今は決して此の宮殿の主權を握つて居るもので

はなく、すべてのことはわしの岳父のアレキシウス陛下が司つて居られる。それにわしの妻と名のつくものがあまりに嫉妬心が深いために貴女とのお話を此の秘密の庭に擇むだけのことです此のわしは何んでロバート伯爵を囚虜にする様なことがありませうに、多分ロバート伯は先日あの海岸の誓忠式の折の亂暴狼藉が陛下の御怒を招いての事であらうと思ふが、わしはその邊の事情はよく知らない。わしの心はたゞ一圖に貴女の美しさにうたれてばかり居て外を顧る餘裕はすこしも無かつた。そして智慧の深い此の老アゼラステスに頼んで、やうやく此の秘密の庭で想ひのたけを云ふやうにして貰つたばかりです。どうぞ察して下さい。此の燃え焦がれる様な思ひを、たゞ貴方だけが鎮めて下さる力を御持ちになつて居ます。さあ、悲しまないで下され、ロバート伯の生命はどうなつたかはまだ判らないのですから、いや今の際は、貴女の御決心ひとつで、それよりもつと力強く生命かけて貴女の爲めにつくす戀人が茲にあるのではありませぬか。」

「もつと力づよいとな。」とブレンヒルダは俄かに眦を決した。「わが夫よりもつと力強いものが此の世界にあらう筈は無い。」

「その強いものは此處にある。」皇儲ブレニウスはさながら陣頭に立つた様な挑戦的態度を取つて「貴方がそれ程に思をかけて居る夫の生命がまだ繋がつて居て、此の世の何處かに蠢めいで居る

なら、此の手で見事に絶ち切つて見せやう。」

するとブレンヒルダは心頭怒を發して眼光鋭く皇儲を睨み挫えたまま、「御身は殿下。殿下と呼ばはつて跳むもよい。わが云ふことをよく聞かれよ。それほど御自身戦つて見たいと願はるるわが夫の君ロバート伯爵はもう此の世にあるかないかは問はぬ。その代りにアスブラモンの城主の娘で伯爵の正しい妻なる此のブレンヒルダが茲にあり。妾は夫の伯爵を措いては未だ一回だも武道に敗をとつた事は無く、且つ御身が左程に伯爵と勝負しないことを残念に思はるるならば、此のブレンヒルダは悦んで御對手にならう。」と云つた。

驚いたのは皇儲殿下で、

「貴女が！ 貴女が勝負をなさらうとな。」

「もとより、御身ばかりかは。果して伯爵が希臘の國法によつて所罰せられたとならば希臘全民族を對手にするも厭ひはせぬ。」

「もしもその勝負に勝つたら、矢張り勝つたものが戀の勝利を得るの條件か。」と皇儲、

「それもよろしい。」とブレンヒルダ「もしわが手に勝が歸したならば、ロバート伯爵を茲に連れ出して呉れらるゝか。」

「もとよりそれを否みはせぬ。乃公の力で叶ふならば伯爵は必ず連れて來やう。」

雙方とも身構えをした。

その時大きな地の底を抉る様な強い響が鳴つて、天地を震動させ、はからずも此の勝負を躊躇させた。

十七

ヘレワードとロバート伯とは、今にも發見されさうな、危険区域のなかに接近しながら、全身耳になつて漏れくる言葉を聞きとらうとしたのであるが、はつきりとは聞こえなかつた。だが、意味だけはわかつた。

「皇儲は慥かに妻の挑戦を受けた様だね。」とロバートが私語くと、

「ウム。しかもよろこんで受けた様だ。」とヘレワード。

「受けたはよいが。しかしあの奴何等の武術の心得もあるまい。女だと思つて馬鹿にしてかゝつて居るのだらう。乃公は乃公の妻が勝つことは露ほども疑はないが、乃公は神かけて此の勝負で名乗りあげて堂々と出て見たい。此の腕が鳴つて堪えられぬ。」

「その心持ちは察する。逸り過ぎた勇氣だとも思ひもしない。だが注意したいが、皇儲はあれでなかなか思つたよりは武術に長けて居る。それに生粹きんすいの希臘人だけあつて、貴殿の様に名譽ばかりからは動かないで、何處まで奸智を絞り出すかわかつたものではない。だから此の勝負は決して公平に武術の上ばかりで戦はれるものではなく、ふかくこちらも考へて準備をせねばならぬ。だからまづ安全を第一にして一まづ此の場を引きさがることにしやう。今にも誰かこちらに來さうだから、はやく、他の別な道をとほつて、此處を逃げだすことにしやう。そして一つ乃公の考へて居ることに耳を傾けて呉れるとよ。」

樹の茂つた向ふの方から、何やら蹙足らしいものが聞えて來たので、これは慥かに誰か、往來して居るらしく思はれる。他の別の道から逃れねば發見される危険がある。伯は聲を忍ばせながら、

「いかにも耳を傾ける。貴公の考へと云ふのは？」

「貴殿は財布をすぐと一人の船頭にやつて、ヘレスポンドの海の向ふにわたり、急いでブイヨンのゴドフレー將軍その他十字軍の面々に此の急をつけ、此の君府の都を威嚇するに足るだけの軍勢を呼びよせ、萬一皇帝が貴殿の夫人を息災に引き渡して呉れない場合には國家を賭しての大戦

争を開くだけの見幕を見せらるることだ。」とレワードが云ふと、ロバート伯は斷乎となつて、

「すれば、貴公は神聖なる十字軍を引きかへさせやうと爲ることになるが、よもやブイヨンのゴドフレーは、かゝる些細な一事のために聖軍を再び此の岸に引きかへす様なことはせず、また此のバリー伯爵としての乃公も、たゞ自己一身の安全の爲めに、それ程の事をしては末代までの耻辱今崇嚴に勝負を挑むだ妻にたいしでも面目がない——それは出來ぬ。」

「すれば乃公の判断が間違つて居たとせねばならぬ。だが貴殿の其の生一本な騎士魂を立てて行かうとするには乃公は全く智慧を涸らしてしまつた。茲に深く敵の術中に陥つて、その最愛の妻の生命も名譽も臺なしになる切羽詰つた危機に居ながら、尙ほその上自分の身が夜中に毒を吞まされて地獄牢におとされる程な下劣な手段をあびせかけられても、そのなかに嚴重に騎士道の禮機を全ふして行かうと云ふ貴殿は、いつたい崇嚴なのか、馬鹿なのかわからなくなつて來た。」

「さう云はれ、ばさうに違ひない。ぢやが乃公の言葉は乃公の眞實そのまゝだ。奸惡な敵の術中に陥つたのは矢張り乃公の不名譽で、その上乃公が不名譽なことをすると乃公は全く耻辱の上塗りをする様なものだ。」

「では貴殿は今のまゝで夫人の名譽と生命とを危険にも惡魔のまへに洒して置かるる心算か？」

貴殿の夫人は凌辱を受けても介意はぬと云はるるか？」

「それは今更云ふて呉れるな。思ふことさへ乃公は苦しい。だが乃公は氣輕にはなれないまでも斷乎とした心持ちで、いつも武道の仕合を見物すると同じことに考へやう。晴の勝負が公平に行はれるならば、必ずプレヒルダが勝つて呉れるものと信ずるが、相手が卑怯な手段を弄するならば、乃公は直ぐとその場に飛んで出て、あの皇儲のプレニウスと云ふ奴の腹黒さを徹頭徹尾さらけ出して、環視のなかに正義に訴へて見る。そして神の裁きにまかせるだけだ。」

ヘレワードは聞いて一寸考へて居たが頭を振つて、「それは貴殿の卿國のやうに騎士の道の盛なところの人々か乃至は戦斧隊ばかりが環視して居る場合ならばよいかも知れぬ。だが茲は希臘だ。あらゆる叛逆、裏切り、欺瞞が平氣で行はれて居る希臘だ。貴殿のその意圖は到底効果を奏することは出来ない。」

「その効果を奏することが出来ない程な、野卑な民族に對しては、天の同情がある筈も無い。彼等が持つ劍がその手に折れ、その妻女が野蠻人に凌辱される時、天は彼等を嘲笑つて居るだらう！」

と云ふロバート伯の顔色をヘレワードが見れば、頗に紅の血潮がさしのぼり、眼が輝いて、興

奮の極度そのもので加之も神々しいものさへある。

「ウム。貴殿の決心の最早や動す可からざるものあるを知つた。貴殿が飽くまでも其の英雄的な馬鹿げた事を実行する以上、乃公も乃公の身の上を考えて見た。思へば戦斧隊の一傭兵としての乃公の今までの生涯はつまらない惨めなものに過ぎない。毎朝面白くもない寢床から起きて、毎晩それに歸つて寝るまで傭兵の武器を纏つて、下司な異邦人と戦つて來た身の程を思えば、乃公も生涯に一度は輝かな名譽ある動機のもとに戦つて、花々しく仆れたいと思ひつゞけて居たのであつたが、今こそ其の時が來たのだ。今こそ眞實輝く名譽の精髓が貴殿の決心のなかに閃いて居る。最早や乃公も貴殿の爲めに生命をすてゝもおしくはない。その上にまた乃公は現皇帝陛下を助けたいと思つて居るのだが、此の奸邪な皇儲を仆すことは、即ちその目的を遂行する一つの道だ。」とヘレワードも感慨深く決心の臍をかためたが、稍あつて、「よろしい。ロバート伯爵。此の事は貴殿が中心の人物である以上、乃公は何事も貴殿の意見通りにしたがはう。ところでその花々しい崇嚴な貴殿の決意のなかに、一つ平凡な考慮をいれたいと思ふのだが、貴殿がブラカナルの牢獄を脱出された事は、最早や宮殿内に限なく知れ亘つた頃だらうと思ふ。實を云へば、此の乃公こそ、それをまつさきに報告せねばならぬ役目で、その疑ひは先づ乃公にかゝるが當然だが

——貴殿の身を何處にかくしたらよいか知らむ。——今にも大搜索が始まりさうにも思はれるが。」

「その點なら全く貴公の意見にしたがはう。貴公の沈勇と智慧に乃公は一切を信頼して居る。」
「匿れて忍ぶと云ふことは、武士の身にとつては、如何にも堪えがたいことと思はるゝかも知れぬが、何しろ茲は奸邪の巢窟ふ希臘宮殿のことであれば、やむないこととして、乃公は貴殿の匿れ場所の最も安全なところとしては、戦斧隊屯營所の乃公の部屋よりもよいところは他に無いと思ふ。よもや乃公の部屋まで搜索しやうとは思ひ付きもしまい。はやく乃公の此の上衣を纏つて乃公と一所に來て下され。すぐと此の庭から出る事にするのだが、今出る道の門番は戦公隊の兵だつたら別に訝みもしないからその心算で。」

と云つて、二人揃つてその門のところまで行くと、扉の番をして居る黒坊婦はヘレワードが推察した通り、すぐと鍵を出して扉を開いて呉れたので、ほつと一息して、自由な世界に出た。それから君府の市街のなかを、なるべく側道を擇むで通つて、ヘレワードはロバートをとうとう戦斧隊の屯營所まで無言で案内してしまつた。屯營所と云つても、ほんの粗末なバラツクに過ぎない。丁度彼等がその門まで行つた頃、そこに立つて居た番兵が。

「ヘレワード殿。食事が始まりました故御急ぎあれ。」と云ふ。ヘレワードは心のうちで之れは丁度よい時機だと思つた。戦斧隊の兵士達は、何れも食堂に急いで行つた跡らしく、同僚の顔をあまり見ずに済むだ。聽て、自分の所に行つて、その隣りにある彼の下僕の寝る極めて粗末な寝所のなかにロバート伯を案内し、伯ひとりだけをそのなかに入れて、誰か來ては困るからと云ひながら、扉をしめ、鍵をかけてすぐとヘレワードは獨りになつて出かけてしまつた。

獨り淋しくとりのこされたロバート伯は、性來疑惑と云ふ心の起るべき餘地のない磊落な騎士でありながらも、流石に此の此のヘレワードのやりかたが、何んだか無意味の様にも思はれないでもなかつた。

「——乃公が魂かけて信頼して居るヘレワードが——よもや此の期になつて乃公を裏切ることがある筈はあるまい。だが、乃公を茲にかうして閉籠めて、置いて戦斧隊の長官に、フランクの猛騎士は、かしこに閉ぢ籠めて置いてあるとでも報告するとすれば、之れほど乃公は念入りに囚にかかつて居る例はあるまい。一度あの地獄牢を脱け出して、又此の戦斧隊のバラツクに囚れたとなると乃公は餘程馬鹿にされて居るかも知れないぞ——いや。夢にも騎士の心に此の様なことを疑つては盟友に對して相濟まぬわけだ——疑はざる心こそ神明は加護を垂れ給ふのだ。乃公は一

撃で猛虎を殺し、一人の番人を仆し、更にあの巨大な野獸を手馴して来た乃公だ。何でオメ／＼と——(とロバートは力を罩めて腕を扼しても見た)——いや、いや。盟友に對して、此の様なことが念頭にだも浮ぶとは、大耻辱なことだ。——それにしても此の君府の都は、奸黠欺瞞が渦を卷いて居るところ、いや、いやあのヘレワードの凛乎とした顔付、あの驚く可き沈着、勇氣、心の底をうち割つて語る言葉、もしあれが虚偽であつたら、天地に眞實と云ふものは無い筈だ。彼の額にありありとその眞實が書いてあるではないか。」

獨り淋しくロバート伯は叢り起る疑惑に重疊されて、それをさながら押しつける様に、眞實の輝に眼を見据えたいと思つて居ると、不圖自分の空腹なことが犇々感ぜられて来た。思へば自分分は随分と長い時間を食はず、飲まずで知らずに過ごしたが、空腹と知ればもう一刻も堪えられないほど、ひもぢくなつて来た。そこへもつて限りなく擴がつて行く疑惑の波紋は、はてはおれを此の様に空腹にして置くのは、乃公の力を弱めておいて、力を削いで、それから捕虜にする巧らみではあるまいかとさへ疑はれ出して来るのであつた。

ロバート伯は疑惑と空腹とに、苦しむで居る間に、ヘレワードは一寸食堂に行つたのだが、口にしたのは眞似事の様にパンの一片ばかり、いつもの様に食卓を共にした同僚と談話に興ずるこ

ともせず、すぐとまた食堂を出て、戦斧隊長のアレキレス將軍の宿所へと急いだのであつた。將軍の宿所の入口にはシリア生れの奴隸が一人番をして居て、ヘレワードの姿を見ると、彼は將軍閣下が最愛の信頼する兵士だと心得て居るから、並大抵ならぬ恭々しい敬禮をして、さてそれから、將軍閣下は只今は不在だが、將軍は是非ヘレワードに會ひたがつて居て、ヘレワードが來たら、アゼラストス老哲人の庭に居るから、すぐ訪ねる様にと言ひ置かれたと云ふ旨を傳へたのであつた。

ヘレワードはすぐと、その足で大急ぎに、コンスタンチノブルのよく心得た近道を駛けて行つて、例の老哲人の秘密の庭の、此の前ロバート伯と二人で這入つた門のところまで行くと、矢張り同じ黒奴婦が扉の番をして居るのであつた。でアキレス將軍は此の庭のなかに居られるかと問ふて見ると黒奴婦は、すこし尖つた様な聲で、

「アラ。貴方は今朝から此の庭のなかに居られた筈ぢやありませんか。將軍閣下にお會ひにならない筈はないでせう。それとも貴方は此のお庭のなかに居らつしやらなかつたのですか。將軍閣下はあなたを御探しましたよ。不思議ですな……」

「え。面倒臭い。お前の知つた事ぢやない。はやく扉を開け！急ぐんだ。」とヘレワードは怒鳴つ

て扉を開くがはいか中に飛び込む。例のロバート伯夫人と皇儲ブレニウスとが問答をしあつた歡樂殿の前を、樹蔭を踏んで過ぎて、その先きにあるすつと構えの質素な哲人の隠宅らしい建物の入口に来て、なかに居るのは將軍か老哲人か何れでも會ひたいと扉をたゝいたところ、すぐと帽の羽毛が天井までも聞えさうな盛装をしたアキレス將軍閣下が出て来て、

「どうした。わしの信頼するヘレワード。何んだか非常に急ぎ込んで居る様だが、何か變事でも起つたのか。はやく話せ。」

「大變な事が起つたから、お知らせに参りました。」

「何事だ。早く話せ。躊躇して居ることではないか。よいにしろ悪いにしろ、御前の報告がどんなであらうとも、ピクともするわしではないか。」と云つたものの、將軍の眼色はヘレワードの様子を見るにつけて不安に動き、その顔色も動き、——その手は革帯に觸つたり劍櫛に觸つたりして落ちつかない有様であつた。「はやく話さないか。どんな悪いことでもかまはぬ。」

「簡単に申し上げますが。」とヘレワードは語り出した。

「閣下は今朝ほど手前に、あのロバート伯が閉ぢ籠めてある、ブラカナルの地獄牢を見る様に命

ぜられましたか。」

「さうだ。それがどうした？」

「手前があの地獄牢の天井蓋のところまで行きますと、變な叫び聲が聞こえましたから、手前はすぐと梯子をおろして中に落ちて見ますと大變です。あの森の男セルバンと云ふ巨大な動物で、應斧隊でよく馴らした奴が、頻りと痛さうに苦しみ藻掻いて居り、尙ほ松明をつきだしてよく見ますと、あのロバートが居た筈の寢臺は、焼けて骨組みだけが残つて居り、それに丁度寢臺に飛びかゝらせる様に繋いだあの猛虎が、頭蓋骨を眞二つに割られて居ります。森の男セルバンはごろごろ轉がたまゝ苦むで居ますし、ロバートの姿は更に見えませず、一人死んだ人間が居ましたから、よく見るとそれは番兵の一人です。咽喉を一突きで實に手際よくやられて居ました。どう探がしてもロバートの姿が見えませんが、おそらく手前がおろした梯子で、すばやく脱れ出たのかも知れませぬ。何にしてもロバートと云ふ男は物凄**い**ばかり大膽な代物です。」

「何故。お前はその時すぐと全軍に警告を發せなかつたのだ。」

「それを考へて見ましたが、閣下の御判断を待つてからと思ひました。もし、はやまつてすぐと警鐘を叩き大吠喇でも吹きますれば、今の此の大切な時機に或は閣下の身に疑ひがかかつて、閣

下の折角の御計劃がとりかへしのつかぬことになりはしまいかと懸念されました。」

「ウム。それもそうだ。よくそれを考へ及んで呉れた。」とアキレス將軍は、聲をひそめて私語くやうに云つた。「さうぢや。むづかしいところだ。何とかして、あの重大な囚人を取りがしたことを發見しないやうな風をよそほつて置かねばならぬが、それにしても、いつたいあの逃げだしたロバートは何處に置れて居るだらう。」

「閣下の深い御智略を以つて捜す外はありません。」

「どうだ。奴はヘレスポンドの海峡を向ふにわたつて、手勢を率ゐて歸つて來さうには思はれぬか。」

「さうなれば、大變なことになつて來ます。あの男がひよつと人にでも相談したら、屹度それを薦められるに違ひありません。」

「だが、奴が假に復讐軍を率ゐて、逆襲して來るとしても、手つ取り早くは行くまい。」とアキレス將軍は考へながら云つた。「わしの思ふところでは皇帝があれ程嚴重に船夫達に、一つたん對岸にわたした十字軍を、こちらに一人たりとも渡してはならぬと勅命されて居る以上、なかなか大勢を引きかへせるものでもなく、且つ十字軍の諸將軍たちも、パレスタインの聖地をめがけて動

いて居る以上、その宣言に對し、ウカと軍勢を一步でも引きかへせるものではあるまい。」

「して見れば。」とヘレワードは考へる様な顔付をして、「二つに一つと云ふ處に思へます。即ちロバートは海峡をわたつて向ふ岸には行つたものの、手勢を率ゐて、こち等を逆襲する手段が無いで空しく恨みを吞むで残念がつて居るか、それとも獨りコンスタンチノブルの何處かの一隅に忍んで居て徒手空拳を慨いて居るか——此の二つのうち、どちらに致しましても、手前の考へる處では急に此の大失體を皇帝陛下に奏上するまでに狼狽する事は無いと思ひます。——ですが此の様な重大なことは手前風情如き無智なもの考へ及ぶ事でも御座いますまいから、一つアゼラステス老人に御相談なされては如何なもので御座りませうか。」

するとアキレス將軍は俄かに色を變へて、以つての外だとはかり、あたりを憚る小さな聲で

「いや。いや。斷じて、——アゼラステス老とわしとは仲のよい友達には違ひないが、此の問題だけは別に考へねばなるまいぞ。どつちか玉座の前に首をつきだして罪を受けねばならぬと云ふ段になると、わしの頭にはまだ一本の白髪しづがも無いことを考へて見て呉れ。黙つて居れ黙つて居れ。わしは今お前に全權を與へるから、どうか今のうちにはやく探し出して、生きて居るなら地獄牢に閉ぢ込め死んで居るなら、屍骸をたしかめてわしに報告して呉れ。場合に依つたらわしはあのロ

バート伯の意を向えてもよいと思つて居る。例へばあの夫人を危難から救つてロバートの手許に逃してやつてもよい。戦斧隊の威厳にかけ行ふ日には、府君中誰だつて反對し得るものは無い。」

「で御座いますが、萬一手前が罪に陥ちる様なことになりは致しますまいか。」

「なんでまたそんな要らない心配をする。おかしなお前ぢなぬ、ハツハ……戦斧隊々長のわしが命令をして居る以上、それが罪になる疑が何處にあらう。其れ程心配になるなら別に命令書を一筆書いてやつてもよい。お前はたゞ正直な一兵卒として將軍の命令通りに働きさへすれば、それで済むではないか。さあはやくはやく、急いでロバートを探し出して、此のわしを安心させて呉れ。」と云つて言葉を暫く切つて居たが、「夢にもアゼラステス老などに相談をする必要は無いらぬ。あの老人は疑ひ深いから、ひよつとすると今の様子を聞くかも知れぬが、よい程に虚言を云つて置けばよい。さあ、はやく屯營所に歸つてくれ。命令書はわしが屯營所に歸るとすぐに書いてやるから。」

でヘワワードはすぐと踵を反して歸つて行つた。

歸る途中にも、ヘレワードは心のうちで——「人間が悪漢になるのは容易いものかも知れない。乃公はもうこんなに上手な虚言つきになつてしまつて居る。一口虚言をつくると、無限に虚言の上

塗りをして行かねばならぬから大變なものだ。乃公は生れて始めてこんな虚言を云つた。すくなくも眞實を匿しおぼせてしまつた。しかも將軍は此の虚言をまもるに、絶對の権限のある命令書さへ書いて保護して呉れる。だが乃公はまだ斷じて、悪魔には魅入られては居らぬ。乃公は騎士道の精神に基いて虚を云つたのだ——。」

と。こんな事を思ひながら、ヘレワードは流石に稍頸垂れ勝ちに樹蔭の道を歩いて居ると、突然に眼前に人間の二倍大もあるかと思はれる一大怪物が出現した。何んだか眞紅い布で全體を巻いて、頗る醜惡な顔をつき出して居る。しかもそれがなんだか極めて悒鬱さうな顔面の表情だ。流石勇士のヘレワードもぞつとした。虚言を云つたための悪魔の出現かと思ふと、その刺那天地が急に暗くなる様にも思へたが、すぐとその正體を見とどけた。それは彼の日頃から手馴付けて居た「森の男」の傷いた姿であつて、此の怪物はヘレワードの姿を見て懐しく寄つて來たのを、ヘレワードはあまりに冥想の奴となつて居たが爲めに、こんなに思ひがけなくも愕かされてしまつたのであるが、それとわかると、

「オ、オ、お前は「森の男」かい。お前はよいところに遁れて來た。此處の森には澤山のうまい果物が熟れて居る。腹いっぱい食ふがよからう。さあよく乃公の言ふ事を聞くんだぞ。お前

は茲二三日此の森のなかに匿れて居るがよい。あまり人に見つからない様にして、その傷をなほすがよい。」

「森の男」は頷いた様な顔付きをした。ヘレワードが云つた言葉が解つたらしく思はれる。

「乃公の云ふことがわかつたか。「森の男」。お前は野獸だが人間の様に虚言をつかんでもいいから美しいぞ。」

「森の男」はまた頷いた様な顔付きをした。そして森の影の方に歩いて行つて姿を消した。すると急にけたましい悲鳴が聞こえた。女の聲だ。命がけで救ひをもとめて居る聲だ。

ヘレワードは突嗟に前後を忘れて、その女の叫聲のした方に駆けつけた。

十八

女の悲鳴の聲をたづねてヘレワードは森の茂みなりに、駆けつけると間もなく、彼の兩腕のなかに一人の婦人があはたゞしく飛び込んだ。女は「森の男」に追つかけて居るのであつた。が「森の男」はヘレワードが巨大な戦斧を振りあげて居る姿を見ると、すぐと女を追及することをやめておづくくと茂つた枝の影の方に匿れてしまつた。

で、ヘレワードは心を落ちつけて、自分の腕に飛び込んで仆れた、女の姿をはじめつくづくと見た。女はあまりの恐怖にもう人事不省になつてしまつて居たが、その纏つて居る着物淺黄の色を主にして五六種の色で染めわけたもので、特に上衣の恰好が丁度近代の婦人のガウンの様で、その髪の結び様が特殊のものがある。その總々とした髪の下顔は、もう死人の様に蒼ざめて居るが、絶世の美人と思はれる程美しい。

實はヘレワードの心は此の姿を眼前にして、雷霆に撃たれた様に顫動した。此の女の服装は實に希臘風でもなく、伊太利風でもなく、佛蘭西風でもない——まがうかたなくサクソン風だ——ヘレワードが郷國で、幼時を送つた頃に見た懐しいサクソンの風俗だ。サクソンの女が茲に現れたとは如何にも不可思議千萬だ。無論此の君府には戦斧隊の人員とともに遠いサクソンから幾人かの女性も伴はれて来ては居るのであるが、そう云ふ女達は何れももう希臘化してしまつて、今ヘレワードの腕に抱かれて居る様な純粹なサクソン風俗をして居るものは一人も無い筈だ。サクソンから来て君府に居る女なら、ヘレワードは大抵顔を見おぼえて居るのであるが、此の女はその何れでも無い。しかしその時のヘレワードは其んな疑問を考へて居るだけの心に豫猶がある筈もなく、彼自身非常な危険な使命を持つて居るうへに、はやく此の女を助けねば絶息してしまひ

さうである。何しろ一刻もはやく女をもつと人目に映りさうにもない場所に運んで行つて介抱を加へるのが急務であるから、彼は自分のよく知つて居る、その近くの或る祕密な岩洞のなかに女を抱えて行つた。此の岩洞は昔埃及教の時代に、埃及神をまつたあとで、岩洞に近づく徑は迷路の様に樹林に匿れて曲り、誰も人の近よりさうにもないところ、矢張り廢墟そのまゝの岩洞ではあるが、古代の名残りの眠れる石の人體の臥像が一つあつて、その胸のあたりに埃及文字で「われ眠る。——醒すなかれ」の文字が古怪な字體で彫つてある。ヘレワードはその文字を一眼見ると、

「何の、忌はしい此の文字。」と云ひさき、戰斧を振りあげて、その石像の首を一撃で刎ね飛ばし「何の。埃及の石くれめ、文字の反對を證據にして見せる。」と叫むだ。するとその臥像の破壊された下の方から、綺麗な水が湧き出て出た。それもその筈、此の石の臥像は埃及の水神を祭つたものであつたのだつた。

それを見て、「ウム。是れこそ天の思召しだ。」とヘレワードは心のうちに感激の叫びをあげて、その平つたい石の盤臺の上にそつと柔かく女の身體を横たえて、

「此の水でわが郷國の美しき女よ、甦れ。」

と水を手にとり、女の動かぬ唇のなかに注ぎ込もうとする瞬間、彼の心は更に雷霆のとどろきを受けた。女はもう絶息してしまつたのではあるまいか！今まさに蠟がつきて消えてしまふ炎の如くに氣づかされる女のその微かな微かな呼吸、水をうつすとその水のために、その微かな呼吸は途切れてしまひはせないかと氣づかいながら、ヘレワードはそつと一雫を乗らして、さながら現代の化學者が、實驗室で嚴かに試みるやうに、その一雫の行衛を凝乎と見まもつたのであつた。その瞬間のヘレワードの感情は、恰も天文を讀まうとする古聖者が、靜かに動かず、地平に月ののぼるを待つて居ると次第に青む夜空の照りに星座の觀測が展かれる如く、血の氣が除々と青白な此の乙女の頬の上にさしのぼり、その唇が鮮やかな紅の色に歸り、ヘレワードが思つたよりも早く女は意識に覺めて元氣をとりかへして來たのであつた。ぱつと眼を開いた女は不思議さうにヘレワードの顔をつくづくと見つめながら、

「此處は何處の世でせう。ヘレワード様。私は死んで次の世に來て、貴方に會へましたのか知らむ、有り難きマリアの聖女様、ようこそわたしの戀人に會はせて下さいました。——でも之れは死んでの後の世界——アレ——ヘレワード様。はやく話して下さい。それとも此の貴方は幻影だけの人からむ。——つい先き程私は、それは怖い惡魔に追ひかけられましたので御座います

が……」

「ベルタ。お前はベルタだ。乃公の戀人のベルタだ。さあ。はやくしつかりとして呉れ。」と、女の聲を聞いて夢中になつ叫むだ。「お前も生きて居て呉れたか。此のヘレワードも慥かに生きて居た。何と云ふ不思議な縁があつたことだ。さ、驚くことはない。はやくお前は何處かに身を匿さねばならぬ。それともお前も今すぐそのやさしい手に捧一つさへ持つなら、あの「森の男」は恐しくも何ともない。勇氣のあるお前だ。乃公が茲に居るのだ。それともひとりお前の爲めに保護をつけて置かうか。」

「いえ。どうぞ誰も他の人は呼ばないで下さいまし」と女は思ひがけなくも再會し得た戀人の腕にすがりつきながら、「あなた。わたしはベルタではありませんか。あなたとベルタと二人きりではありませんか。」

ヘレワードも女を抱き締めながら、「ベルタ。ベルタ。お前はどうしても乃公がヘレワードだと云ふことがわかつて呉れたか。乃公はうれしいぞ。」

すると女は心持ち眼をふせながら、

「最初わたしは、さうか知らと疑ふ心持ちで御座いましたが、あの——貴方の額についた野猪の

牙の傷跡で、もう貴方と云ふことが疑ひなくなりました。」

さう云はれて見るともうヘレワードは、今自分が抱いて居る女は寸分の疑ひを容れない、正銘の彼の戀人であることが確證されたのであるから、うれしさの上にも俄かにうれしさが込みあがつて、刻下の自身の緊急な用事も何もかも、すっかりわすれて恍惚とする程にならざるを得なかつた。野猪の牙の跡——想ひ出せばヘレワードと、ベルタとの幼い故郷における日の事が勇ましい繪巻物の様に彷徨と眼前に繰り展げられる。見わたす一面の蒼鬱とした大森林のなかを、一群の村民達が、老若男女とも大勢揃つて出て、頻りと大聲を叫びたてながら獵をやつて居る。方々から矢が亂れて飛ぶなかに、一疋の巨大な野猪が躍進して來た。その野猪は荒れ狂つて、丁度その進路にあたつて居る、一人の騎馬の少女の凛々しい姿を目がけて居たのであつたが、その少女は巧みに矢を番へて、その野猪を射あてた。だが巨大な野猪は、たゞ一つの矢だけでは仆れさうにもなく、益々荒れ狂つて飛んで來て、その少女の騎つて居る馬を一屠りに屠り殺し、仆れた少女も其の場に殺されると云ふ、危機一髪のところを矢庭にヘレワードが飛び出して來て、荒れ狂ふ野猪と少女との間に立ち塞がつた。もとよりその時の野猪とヘレワードとの格闘が、手輕なものであつた筈は無い。野猪はヘレワードの手で辛くも打ち仆されたのであるが、ヘレワードもま

たその額を野猪の牙にかけられて、九死に一生を得たに過ぎず、今もその傷の跡が額にのこつて居て、ベルタに昔を思ひ出させたのであつた。ベルタは感慨深げに、

「あの時お別れしてから、お互の身の上はどんなでありましたのでせう。あなたは今此の外國の希臘で何をして居らしやいますか。」

「ベルタ。察して見て呉れ。」とヘレワードも感に堪えられない顔付をして、「ベルタ。あれからお前は矢張り此のヘレワードに、愛を誓つたままのベルタで居て呉れたか。それにしても神様は何故に此の様な悪戯をなされますことか。察して呉れ、此のヘレワードはこんな時不思議な再會をして、又すぐと別れて死なねばならぬ運命なのだが……」

「アレ！ヘレワード様。」とベルタは此の刹那に自分の思ひ思つた戀人の唇から、——別れて死なねばならぬ——と云ふ言葉を聞いたので驚きながら「貴方は妾の思つた程も貴方の御胸に此の妾がありませんでしたのでせうか。妾は故郷に居ましても外國に居ましても、また人に侍ふ時も、自由な時も、悲しい時、楽しい時、貧しい時、富んだ時、何時だつて貴方をお忘れした時はなく、あのオデンの神様の石の前で誓ひました、固い固い貴方との、お誓はちやんと破らないで守つて來ましたものを……」と怨ずる様に云ふと、

「ベルタ。それは云ふて呉れるな。」とヘレワードは手を振りながら、「それでは御前は此の乃公に疑ひをかけることになる。此の乃公が何んでお前を忘れた事があらうに。」

「では貴方も忘れないで下さいましたか。」と女はその大きな翠色の眼から、とゞめ得ず涙を流して、「やつぱり——やつぱり——ヘレワード様はあの時の妾のとほり、妾のもの——妾ばかりのヘレワード様でありました。」

「だが、ベルタ、乃公の云ふことを聞いて呉れ。」とヘレワードは女の手を握と握りながら「あの時乃公達はまだほんの小供同去で、無邪氣な心持ちから、何も辨へずに、あのオデンの神の石の前で誓を樹てたのだが、思へばあのオデンの神は、もとは血腥い慘酷な魔術の神様で、二人の愛は血腥いなかを行かねばならぬ運命を持つて居る。だから今までのお互の愛の運命も拙かつたのかも知れぬ。だから今日からはほんとうに正しい神様の前で、誓を樹てなほさう。そして今も此の身にさし迫つて居る怖い血腥い嵐のなかを、二人は勇ましく進んで行くことにせねばなるま
5。」

ヘレワードとベルタとの愛の蜜の様な言葉は、此のまゝ茲に措いて、私は今すこし散文的にな

るかも知れぬけれど、此の二人の戀人が英吉利の片田舎で、野猪狩をやつた時から、此の再會にいたるまでの間のことを、一通り叙事的に物語らねばならない破目に陥つた。之れは作家としては極めて不手際な拙劣な齟齬であるかも知れぬ。だが仕方がない。英國十世紀の頃に、一揆ばかり起して居る暴動的なサクソン族の王にエドリックと云ふのがあつたが、此の王の治下に、ヘルワードの父のワルテオフと云ふものと、ベルタの父であるエデルレドなるものがあつた。兩人とも酋長格の豪族であつて、盛に野獵などやつて騒ぎまはつて居た。或る時はデボンシアの肥沃な地方を荒しまはつたり、また或る時はハムプシアの閑い森林のなかを騒がしたりしたのであつたが、とにかく、エドリック王の號令の反響する範圍内で、此の二豪族は頗る幅を利かせて居たのであつた。謂はゞ此の二豪族は英國に於ける、サクソン族の最後の獨立的氣焰を揚げ得た連中に數ふべき手あいであつて、史上 *Foreshers* 即ち「森林人」を以つて目され居るもの、彼等は嗜^すきな遠征や時に掠奪やを禁壓されてしまつてからと云ふものは、専ら森のなかに狩獵をやつて持前な愉快な心を慰めて居るのであつた。だからして自然文化と云ふ眼から見るとは、彼等は當然一步を時勢に遅れたもの、寧ろその遠い先祖がゲルマンの森林に居た頃のことを想望せしめる風采を有し、ヘスチングの大戦以前に或る程度まで發達した英國文化には、何等の關係もない

としか思はれない代ものである。

だから彼等の間には、自然古い祖先の迷信なども復活し、若い男女が情熱の誓ひをなす場合などもオデンの石の前で、それを誓ふと云ふ様な風習も行はれたらしい。無論その頃ではオデンの神は最早「死せる神々」のうちの一人で、誰とて眞面目に信仰するものは無かつたのであるが、迷信の復活が何時でも青春男女の戀の誓に現れて来るのは、古今の通則である。

戀の誓に現れて来る古い祖先の迷信とともに、彼等サクソン族のいろいろな古い習慣や社會生活の方法等も復活して居たのであつた。即ち彼等「森林人」の生活は自然若い青春の男女を接近させる機會が多く、したがつて早婚が盛に行はれる結果、子孫が増加し人口が過多になり、その生活の資料に窮する様な状態となるから、彼等の間には其處に自然と一つの社會法則が、恰も神が受けた聖なる習慣であるかの如くに生じた。即ち如何なる場合でも男は滿二十一歳にならなければ結婚生活をする事が出来ないと言ふ習慣であつて、此の習慣の爲めに彼等「森林人」の早婚が禁ぜられ、過大な人口繁殖が停止されるわけになる。

しかし滿二十一歳にならなくても、本人同志が夫婦の誓だけはすることが許され、雙方の兩親も別に之れに反對することは無かつた。たゞ誓をしたまゝで男が滿二十一歳になるまで待たなけ

ればならぬのであつて、もし此の誓を破る様なものがあれば、彼等は非常に不名譽な *hiddering* と云ふ形容詞をくつつけられ、社會から極度の侮蔑の眼を以つて見られるから、そんな侮蔑された生活をするよりは、いつそ自殺した方がと云ふ事になる。彼等サクソンの「森林人」は武士道的道徳と克己心との強い民俗であつたから、此の誓を破るものは滅多に無かつた。そしてそれと反對にこゝに一少女があつて愛の誓を守り通し、首尾よく戀の相手の男が満二十一歳になるまで待ち、夫の愛する腕のなかに、一家の主婦としておさまることが出来れば、此の女は非常なる尊敬を受け、何處に行つても淑徳の偶像の如くに崇められた取扱ひを受けるのであつた。だからサクソンの女は命を賭けても此の誓を守らずにはおかぬ。

かう云ふ民族の空氣のなかであつたから、あの野猪狩のあつた日からと云ふものは、ベルタとヘレワードとは、恰も天が指圖をした戀人同志かの様に、多くの人々から認められ、此の上なく似合ひの戀人同志として取扱はれたのであつた。だからベルタの美貌はその部落で評判になつて居りながらも、ヘレワード以外の若者はその手を把ることを避け、またヘレワードも比類なき好青年でありながら、村の祭日などでも、ベルタが其處に居る時は、他の少女達はヘレワードの傍に座をとらうとは思ひもしなかつた。かくしてベルタとヘレワードとは、二人で、オチンの石と

云はれて居る墮圓形の穴のあいだ石に、手をとほしあつて固い握手をして永遠の戀を誓ひ、もし此の誓を破る様なことがあつたら、男ならばその時その誓の儀式に列した十二人の若者が揃えてつきだして居る十二の槍の穂先に屠られねばならず、女ならば、そこに髪を解いて繞つて居る十二人の少女達の、その十二人の髪の数よりも尙ほ多く繁く災難に見舞はれねばならぬ運命となつたのであつた。

かうして若いサクソンの子達の間燃えあがつた。キユピットの松明の炎は、その後二三年は愈々輝かに華やかに美しく燃えつゞいて居た。はじめの程はたゞ無邪氣なまゝに遊び仲間であつたが、ヘレワードの満二十一歳が近づくにしたがつて差しさはお互の胸に心に燃えれば燃えるほど増して來て、道の途中にあつても背向け勝ちな顔に、火の出る様な想ひをすることが多くつた。もう結婚の時も指折り數へられる程に迫つて來たその時。英國王ウキリアム・ルユツファスは森林のサクソン族を全滅させる企圖を實行したのであつた。ウキリアム・ルユツファスの眼から見られた、森のサクソン族ほど厄介な憎惡の權化はなかつた。彼等サクソン族の不屈な自由な心は不斷に反抗の種を蒔き、森にサクソン人がある間は安眠も出来ないと云ふ有様であつたから、サクソン退治は、ウキリアム王家の宿願であつたと見える。王はノルマンの全軍を聚め、順化したサ

クソン人等をも加えた雲霞の様な軍勢をもつて、サクソンの部落におしよせて来て、ワルセオ
フ家エンゲルレド家の二豪族を、一ひしぎにしやうとしたのであるから、此の二豪族は施すに
何の策もなく、たゞわずかに部落の婦女子その他武器をとり得ざるもの等を聖、アウガスチンの
住僧のケネルムが親類筋であるのを幸ひ。その尼寺に避難させ、たゞ戦つて死するを覺悟の前に
その祖先傳來の勇氣を振ひ立つたのであつた。まことに戦ひは空を荒れまはつた雷が、地に墮ち
た様なものであつた。不幸な二豪族の家長は戦没してしまひ、ヘレワードもまた同じ運命に絶命
してしまふところであつたが、一度嵐の如くに捷ち誇つたノルマン軍が過ぎ去つたあと、その戦
場に隣の部落の人達がやつて来た時、惨たらしくも澤山に轉つて居る屍體はたゞ鴉や鳶やの嘴に
啄かれて居たが、その間にほんの虫の息ばかりの仆れなヘレワードを見つけ出したのであつた。
ヘレワードは隣の部落の人達にも、評判のよかつた青年で、尊敬を受けて居たから、すぐと助けら
れて深傷ふかたもなほり元氣も恢復するまで、親切に介抱された。ヘレワードは元氣が恢復すると同時
に、兩豪族の死を聞かされたが、先づ安否を問ふたのはベルタとその母との事であつた。がその
部落の人達は誰もそれを知らなかつた。聖アウガチンの尼寺に避難した女達の或るものは、ノル
マンの貴族達が奴隷にするために捕虜として奪ひ去り、その他のものは僧侶とともに遠國に漂流

させてしまひ寺塔も尼寺もすつかり燃やしてしまつたと云ふことを大ぶたつてから聞いた。

こんな悲しいことを聞かされて、ヘレワードはしばらく失神したやうに慳まつとして居たのであ
つたが、聽て決然死を覺悟して戀人の搜索をはじめた。もとより森のサクソン人が、一人でも
生き残つたとあれば、その場に殺されてしまふのであるから、彼の危険は云ふまでもないが、ベ
ルタと云ふ名を尋ねて、あだかも巢を焼かれたあとの蜂が哀れにも、二三羽飛び去りかねて居る
様な乞食姿のものたちまでに、そのことを詳しく聞いて見たのである。けれど、何の手がかりも
掴むことは出来なかつた。そしてやうやくにして知り得たことは、おゝかたエンゲルレド家の母
も娘も諸共に、殺されてしまつたであらうと云ふだけであつて、その最後の状態が如何に慘虐を
極めたものであつたかは、ヘレワードにとつてはまことに想像するだけでも、堪え忍ばれないこ
とであつた。で、ヘレワードは此の上戀人を搜索して見たところで、到底自分の心を悲慘にする
ばかりだと云ふ事に見きはめをつけ、搜索することだけは思ひとゞまつてしまつた。

此の若いサクソン族のヘレワードは、此の世に生れおちるとから、ノルマン族に對する憎惡と
反抗との遺傳的精神を持つて居たのであるが、更に今度此のノルマン軍が聖アウガスチン尼寺を
焼き拂つたと云ふ一事は、一層深くヘレワードをして憎惡と反抗との氣を抜く可からざるものに

し、彼の五體も精神も怨憤に燃え爛れてしまつた。其の當時のヘレワードは憤怨のあまり、すぐにも單身海峡を打ち渡つて、ノルマン族の本土を衝いて、斬人斬馬の物凄い光景を演じだして見たいとまで、夢想したのであつたが、しかしこのやうな狂的な夢想が、もとより長く續かう筈も無く、たゞ生ける屍そのまゝの姿で、啾々の鬼哭を續けて居る有様であつた。ところが偶然にも彼は聖地巡禮の途にあると云ふ、棕櫚葉を持つた一老人に會つた。その當時聖地巡禮をやるものはみんな手に棕櫚を持つて居たものらしい。此の老人は虚言か眞當か判^わ知らないがヘレワードと話して居るうちに、ヘレワードの亡くなつた父とも昔友達であつたし、彼と同じ故郷のものだと云つて、ヘレワードを懐しがらしたのであるが、その實は希臘の宮廷から、世界の各地に派遣されて、戦斧隊の隊員を募集する役目をもつた男が變装をして居るのであつた。だから此の棕櫚葉の老人は人の心を説きつける上手な腕もあつたし、懐には澤山を金のはいつた財布もあつた。そのうまい口振りで説きつけられて見ると、その時の破れかぶれの慘憺とした心持ちで居るヘレワードが、何うして靡かないで居る筈があらう。彼はすぐと希臘朝廷の戦斧隊の隊員になることを此の上も無い有難いこととして、承諾してしまつたのであつた。殊にその棕櫚葉の爺さんの云ふことに依ると、その頃ノルマン族は、ロバート・ギスカードとか其の子のポーモンなど云ふもの

を將軍にして大軍を率ゐて希臘を荒しまはるので、希臘皇帝は之れ等を防ぐために是非とも戦斧隊を組織してあたねはならぬと云ふのであるから、ヘレワードにとつては恨み重なるノルマン族に對する憎惡心を慰める、絶好の機會であると思はれたのも無理からぬ事であつた。それにまた遠く東方の希臘に行くと云ふことは、戦地に近づくことでもあり、出来ることなら此の機會を利用して一度パレスタインの聖地を巡禮して、あれほど固い愛の誓をして置きながら、死に別れか生き別れかわかなくなつた自分の慎人に對する悲しい心持を慰めやうとも思つたのであつた。一方、棕櫚葉の老人は勇ましさうなヘレワードと云ふ、青年を手にいれることが出来て、彼を同僚に手渡して、すぐと君府に連れて行かせる様にしたのであつた。

棕櫚葉の老人は後になつて、ヘレワードを發見したと云ふ廉で、希臘の朝廷から大變結構な褒美さへも下賜されたと云ふことであるが、其の時此の棕櫚葉の老人が手帳に控えておいたヘレワードの家の血統のことなどが、報告書として君府の朝廷に差し込まれたのであつたが、例の老哲學者アゼラステスがそれを見て記憶し、はじめてヘレワードに會つた時、彼の父の名前まで云つて、自分を如何にも超人的な神變不可思議な智識者の様に思はせて、その神通力をヘレワードの腦裡に刻み込むことに成功したのであつた。此の方法は戦斧隊の隊長であるアキレス將軍も亦利

用したことで、將軍は先づこれでもつて老哲人同様にヘレワードの心を得、尙ほヘレワード以外の多くの戦斧隊員の心をも得たのであつた。しかし何處までも正直一方の純朴なヘレワードは如何にしても老哲人や、アキレス將軍やの陰謀の良に捕えられることなく、終始一貫して希臘皇帝陛下の爲めに忠誠の道を辿つて行くことが出来た。

ヘレワードが戦斧隊員になるまでの概略は、右の様な次第であつたが、それにも更に劣らずベルタの方はまた頗る斷腸的な場面が続いて行つた。何しろ結婚の日を指おりかぞへて、慎み深い接吻と抱擁との實に希望に漲つた状態であつたところを、突然青天の霹靂の様に慘たらしく別け隔てられる運命となり、數奇な境涯を幾つも経過して、やつと再び思ひがけなくも此の廢墟の洞穴のなかに失神状態から醒めて、戀人の顔を見得た——しかもその戀人はすぐとまた生命を賭けて戦ひに出やうとするの時である。ベルタの心持ちにはすぐ其の特別れてからの事が、まさまさと想ひ出されて來た。聖アウガスチンの尼寺がノルマン軍に圍まれて焼打ちにされた際に、ノルマン軍中の一人の老騎士がベルタを自分の分取品として、連れ歸ることにした。此の老騎士はアスプラモントの城主であつたが、ベルタの美貌を見て、之れは自分の娘の侍女として最も相應はしいと考へたのであつた。アスプラモントの城主の娘はその時、まだほんの少女期を過ぎたばかりであつて、且つ城主は若い夫人を迎えたにもかゝらず、此の娘以外他に小供が一人もなかつたので眞に掌中の玉の様に愛着したのであつたから常々から、娘の爲めによき侍女をとばかり心掛けて居たところであつた。伯爵領アスプラモントの城内では、城主よりも奥方の方がすつと若くしたがつて、奥方の伯爵夫人の方が寧ろ城主の意を動かし、更に娘は最上の鐘愛物であつたから、城主も伯夫人も娘の爲めに、意を動かされると云ふやうな状態であつて、一にも二にも娘のブレシヒルダの支配力が強かつた。

當時アスプラモントの城主は、その娘をを教育するにあつて、どちらかと云へば成るべく優しい女らしい淑女の型を望んで居た。時代は史家の所謂暗時代に屬して居て、歐洲の天地は到るところに殺伐の氣風が漲つて居り、婦女子と雖も武術の心得がなくてはならぬ世の中ではあつた。けれど、城主の眼には平和の曙が映つてゐた。そして次の代に此の城の女王たるべき娘は武藝よりも女らしい、淑雅な徳を研かねばならぬと云ふ見地から、特に物優しさうなベルタの美貌を見て、之れこそ娘の侍女にと、天から與へられたかのように悦んだのであつた。最初聖アウガスチンの尼寺を焼いた時、アスプラモントの城主は、ベルタだけを連れて歸らうとしたのであるが、ベルタは母親の胸に抱きついたまゝ離れやうともせず、如何にも物の哀れを催さしめる光景である

アスプラモントの城主は、當時の滔々たる荒くれ武士にも似ず、流石に涙ある騎士であつたから此の状を見るに忍びず、母と娘との情にひかされてしまつて、心のうちに母親の方は自分の奥方の侍女として使つてもよいと思ひ、母の娘との兩方を助けて連れ歸ることにしたのであつた。無論暗黒時代の戦場で、騎士たるものがさう女々しく、優しい心を見せる事は忌まれて居るのであつて、傍で見て居て嘲罵の笑ひをなすものや、怒鳴るものやが無いでもなかつたが、アスプラモントの城主はあるものには錢をそつと握らせ、またあるものには槍の鎧こころをかけて、此の哀れなサクソンの母と娘とを心やさしく勞つて連れ歸ることが出来たのであつた。

情け深い此の老騎士は、アスプラモントの城に歸つてからも、極めて嚴肅な慈愛の深い生活をつゞけ、サクソンの母と娘とに對しても、決して之れを奴隷視するやうなことは無く、常に保護者としての地位にたち、ベルタ達は以前にも増した様な幸福な心持ちで、此の故郷を遠く隔つた佛蘭西で時を過ぎて來たのであつた。アスプラモントの城主ほどなよい主人に侍る例は他にあらまい。此の城内でベルタは、女としての優しい道を残らず教へ込まれた、ベルタを優しい女にすれば、屹度ベルタにひかされて、姫も優しい女の道を中心ける様になるであらうと云ふのが、城主が心に抱いて居た希望であつた。かう云ふ風でベルタは音楽とか、縫ひ針の仕事とかその他

その當時の女の心掛くべき事柄には、非常にはやく上達したのであつたが、彼女の侍るアスプラモンの姫君は、これはまたその正反對に、生れおちるとから武道の神でも取つ恐いたものか、何處までも其の趣味が戰陣的で、朝から晩まで武藝の勵みつゞけ、城主は明けても暮れても、之れを頭痛の種にして居た。——頭痛の種子にしながら、老の年波がませるまゝに此の世を去つてしまつた。あとにのこつた姫の母は、もはや姫を制禦するだけの力もなく、自分の若い時を顧みれば、矢はり暗黒時代の騎士の娘として、武道を勵むだ昔も思ひ出され、姫の事は姫が思ふまゝに委せると外は無かつたのであつた。

ベルタは母親とともに、城内で非常に愛され、特に姫のブレンヒルダは此の上なくベルタに愛着した。しかもベルタが女らしい、音楽や手藝やに秀づるから愛するのではなくて、ベルタも昔ハムトンの大森林で、荒くれた狩獲に武士的魂を練つたサクソンの娘、何處かに犯しがたい稔とした氣象のあるのを、深くもブレンヒルダは見えてとつて愛したのであつた。

アスプラモント城の老自刀も、もとよりブレンヒルダに劣らぬほど、ベルタ親子を愛して居たのであつたが、たゞすこしばかりベルタの心持ちに背く様な暴君振りをして見せたことがある。元來アスプラモント城の老刀自は、その夫の嚴肅な宗教生活の感化を受けた爲めであるかも知れ

ぬが、サクソン人をさへ見れば、どれもこれも異教徒であると、心掛けて居る風があつた。で常々夫にも、あのベルタ親子は是非とも、も一度基督教の教會堂で洗禮をしなほして、そしてほんとうのフランク風なクリスチャン・ネームで名を呼ぶやうにしないと、同じ城内に置くにも心が隔つて居るやうな気持ちがあると、語つて居たのであつた。で此の老刀自は主人の嚴命でもつて此の事を實行するのは、無論虚偽なことではあるが、無理にも強制する態度に出たのであつた。

ベルタの母親の方は考へも老練して居り、娘の身の上を思つて、心のうちでは多少の不平を押し包むで居ながらも、老刀自の云ふがまゝに、それより以來は自分の名前をマルタと云ふフランク風なクリスチャン・ネームに改めて、それで一生涯をとほしてしまつた。

だがベルタだけは此の時に限つて、日頃の従順な優しさにも似ず、凜然として、屈せぬサクソンの魂を發揮した。ベルタはおとなしく教會堂の祭壇の前までは連れて行かれて、洗禮は受けたのであつたが、彼女はもとよりはじめから正しい基督教信者で、決して異教徒では無かつたのであるから、新しいクリスチャン・ネームを受けることだけは斷然として、石の様になつて拒絶したのであつた。いくら老騎士がやかましく嚴命しても、老刀自が説服して見ても、また彼女の老母がなだめて見ても、ベルタはたゞたゞ頑として聞きいれない。あれほど優しくおとなしかつたべ

ルタが、何うして此の事にだけ是れ程に頑固であるか、城内のものは擧つて警嘆したのであつたが、やつと彼女の老母がその理由を、人の居ないところでベルタに聞いて見ると、

「お母さん。」

とベルタは涙を幾筋も頬につたはせて、怨んでも恨みきれないやうな残念な顔を母に向けながら、

「此のベルタのお父さんが、若し生きて居られたら、之れほどな侮辱を受けるまえに、とつくに自害して居られたかも知れませぬ。妾はサクソンの娘ベルタ——ベルタと云ふ名前で立派な愛の誓を樹てたことが御座います。お母さんも御忘れにはなりませんまい、あのヘレワード様の事を、——もしわたしが此の尊いベルタと云ふ名前を佛蘭西風に、アガタと代へる様なことでもありませんなら、——あゝ、妾はもう死んだ方かまして御座います。」

と云つて泣いて泣いて泣きやまなかつた。物も云ひ得ないで暫くの間は歔歔りあげてばかり居たのであつたが、

「——どうしてもとならば、いつそ此のベルタを殺して下さい。主人がアガタと云はるゝとも妾にベルタで必ず押しとほします。もし此の先きあのワルテオフ家の息子が、再び此のエンゲルレ

下家の娘とめぐり遭ふやうなことがありました際に——あの人はあのヘレワード様は、屹度あのハムトンの森で呼びなされたベルタと云ふ名前でお呼びになります。」

どんな手段をとつて説いても、宥めて見てもベルタは頑として聞きいれない。そこで老刀自はたうとう決心して、ベルタに、之れほど云ふても聞きいれないならば、此の日かぎりもうベルタを姫の侍女と云ふ役目から離して、遠くアスプラモントの城外に放逐してしまふと云つて、極めて嚴重な斷乎とした決心を示した。だが此の老刀自の嚴かな最後の言葉に對しても、ベルタは秋毫もひるまなひで凜乎とした態度を持ち續けた。

ベルタは飽くまでも尊敬心は失はないが、しかも飽くまで頑固に、自分は今姫君と別れねばならぬことは身を裂かれる程に辛く悲しいけれど、しかし、自分が幼い時に誓つた、此の愛の名前はどうしても代える事は出来ない。之れはサクソン民族の傳來の魂であるからと云つて一向聞きいれない。で流石の老刀自も勘忍袋の緒を切らして、それなら出て行けと追放を命じやうとするところを狼狽しく此の場にブレンヒルダ姫が駈けこんで来て、

「母上様。私の急にはいつて來た事をおゆるし下され」と日頃の大膽不敵さにかへ、加へて、此の姫は今日は顔に燃ゆる様な決心閃かしながら、「今、母上様はベルタを追放なさらうとの御思召

で御座いますが、ベルタは妾の最愛の侍女、もしベルタが今日限りアスプラモント城の濠の橋を渡つて遠くに行くならば、此のブレンヒルダも共に此の城を出て行きます。ベルタは何處までも妾の侍女で、妾はランスロットにもまさる女の騎士、槍と楯とを持つて世界のどこの果てまでも武道の修業に出かけます。」

と云ふと母の老刀自も屹となつて、

「ではブレンヒルダ、そなたはいつもの武術氣狂ひになつて、出て行くことを今日はゆるしてあげませうが、日が暮れるまで必ず此の城にお歸りにならねばなりません。」

すると姫もまた開きなほつた調子で、
「母上様。では妾はすぐと出かけて行きますが、おゝ空を照らす太陽は、此の侍女のベルタの名前、及びベルタが侍く此のブレンヒルダの武名が、此のアスプラモントの預地として、角笛のひびく限りの處に高々とあがらない迄は、斷じて西の山の端に沈むことはありません。——さあ勇め、勇め、妾の一番すきな侍女のベルタ。」

と云つて姫はベルタの手を大きやうに把つて固く固く握り締めながら、

「おゝ、妾の愛するベルタ。よしや天の神はお前をお前の故郷から追ひ、お前の最愛の戀人から

離れしめたとするも、天の神はまたお前と妾とを姉妹よりも、尙ほ愛しあふ友達として下されたのではないか。さあ二人は之れから世界に武名を輝せるために、楽しい旅に出ることにせう。」

之れには流石の老刀自も、一驚を喫して困つてしまつた。老刀自は姫が全く此の様な狂想染みた企圖を實際に行つてすぐその場にも、武道修業の何時を止め度ともない、旅に出かけることを覺悟せねばならない。姫が一つたんなこんなことを云ひだしたら、最早や二度と後ろに退く様な氣性でない事は、千も萬も承知してゐるのであるから、いくら夫の老伯爵と力を協せて姫をとゞめやうとしても効果のないことは知れきつて居る。でどうしやうかと老刀自は、全く受身の態度になつて言葉も出ないでもぢもぢして居ると、そこへ老刀自のサクソンの侍女であるウリカ、今は名をマルタと改めたベルタの母親が、老ひの才覺を絞つて、娘ベルタに意見をしだした。

「これ、これ、娘。ベルタ。お前は日頃のやさしい心持ちになつて、お前が日頃から受けた御恩に御報ひせねばならぬのは、此の時では御座りませぬか。妾の云ふことをよく聞いて下され妾はお前よりは齡も老けてをり、よい判断も持ちあはせて居る。またこちらの姫君様。妾が日頃からお愛み申しあげた姫君様、その様な姫御前にあられない武道修業などと御云ひなされては御母君様を御心配させ申すばかりでは御座りませぬか。すこしは孝行と云ふことも、また女性の

優しさと云ふことも御心に掛けて下さりませ。——ほんとに二人とも揃つて餘り頑固過ぎはしませぬか。」

と云つて此の老ひたる母親は、姫と娘との顔をつくづくと見較べ、自分の今云つた言葉がどれほど二人の心に効果があつたかを、測る様な心持ちで居たが、まだ二人が頑固に押しとほさうとする氣勢を見てとつて、

「では此の老婆の言葉としては、さしでがましいことかも知りませぬが、これには一つよい方法を考へつきました。此の妾の考へついたことをよく聞きわけて下さいますなら、奥方様の御希望にも叶ひます上に、またお姫君様ならびに娘ベルタの頑なな心持ちもとほることになるかも知れませぬ。」

と云つて、老刀自のゆるしを欣求する様な眼付きで言葉を漏らしたので、老刀自は老母に話して見よと云ふ會圖をすると、老母は説き出した。

「奥方様、かう申すも口はばつたい事かも存じませぬが、サクソンの人達も、もう今時となりましては皆正しい基督信者でありまして、夢更異教徒などでは御座りませぬ。妾達の故郷のハムトンの森におきましても、此の頃はこちらと御同様に矢張り復活祭の季節を楽しく賑やかに暮すの

が習慣で御座りました。そしてだれも心の底から、此の國の信者達と同じ様に羅馬の御法王様を崇ひ奉つて居ります。それに妾達の故郷におきましたは、徳の高いケネルム長老様がいつも御説教をあそばして、その有難い御説教の御かけか存じませぬが、誰とて異教徒染みたことをするものは一人もない有様で御座いました。で御座いますが、處かはれば言葉も變るとか云ふたとへも御座りまして、妾等サクソン人間で呼びあふ名前が、こちらのフランク人の方の耳にはおかしく聞えて、丁度異教徒の名前の様に御心持ち悪く響くことで御座いませう。さやうな次第で御座いますから、妾の娘がサクソンの名前を持つて居ることにして、たゞ此の城内に侍女としてお仕へする間だけアガタと云ふ佛蘭西名前を呼んでいたゞくと云ふ事に御許し下されば、なんぼ頑固な娘でもよろこんで納得することと思はれます。これが此の城内の平和の爲めの一番の近道と存じます。奥方様のお寛いお心で此の事を御ゆるし下さいますならば、娘は前にもまして、御姫君様に忠義の道を勵むことと存じます。」

此の老母の提案を老刀自は、自分の言ひ出したことも後ろに退かないで、姫の頑固とも調和の出来る方法として非平に悦んだ。そして

「此の教會の長老様が、それをおゆるしになるならば、マルタの言葉はたいへんよいことに思ひます。」

と云つた。

無論その教會堂の長老はそれを是認した。

姫君も是れに不賛成をとなへる理由なく、娘のベルタも自分の愛の名は、飽くまでも自分のものとして保有して、たゞ此の城内に仕へて居る間だけ、アガタと呼ばれることに何の不平もないことを明白に承諾した。アガタは奉仕の名前ではあるが、バプテスマの名前ではない。——と云ふ事で城内の平和は首尾よくとりかへされたのであつた。

此の一時の頑固の結果は、以前にもました更によいものとなつて、ベルタが姫君に對してつくす眞心は、更に幾倍の熱心を加へて來た。もう斯うなつては、ブレンヒルダ姫とベルタとの關係は主従と云ふのではなくて、眞に心と心との熱く觸れあつた友達である。熱い心根で愛されて仕へ熱い根心で仕へられて、尙は一しはに心の熱さがまして行く際涯も知れない、心の奇蹟が現れて來たのであつた。姫が武藝に對するロマンチックな狂想は、愈々日を追つて募つて行くと、ベルタもまたその狂想の雰圍氣のなかに自由に動いて、まるで二人の女ドンキホーテが親しくして居る様な日が續いて行つた。しかし同じく武藝に關するロマンチックな狂想に耽るにしても、流石

にベルタの方は、姫君ほど底の知れない狂想に前後を忘れる様なことは無く、むしろ只強く只驚かず端然として姫の行動を見まもると云ふ風であつて、姫が極度の危険にはしる場合は、何時もベルタがそれを諫止すると云ふ風であつた。ベルタは幼い時分から大森林の狩獵などで、怖い光景の大案闘を見なれて居り、血醒い場面や、人の斷末魔などやを幾度も経験して來て居たのであるから、姫と武者修業などに出かけて、姫が思ひきつて止め度もなく冒險心を發揮する様な場合でも、すこしも驚き魂消た様な風を見せることなく、ほんとうに姫が危険である僅かな場合だけを正確に認めて姫を有効に諫止すると云ふに過ぎなかつた。だから姫もベルタの沈着な勇氣に對して並大抵ならぬ尊敬心を抱く様になり、ひろいアスプラモントの領内でも、姫を諫止するの力のあるものは、ベルタがたゞひとりである、と云ふ様に何時しかなつて來た。姫を諫止する手心もまたベルタは實によく心得たもので、他の人が眞正面から反對でもしたら、必ずぶつこはしになるところを、ベルタは極めて手輕に側面から、首尾よく好結果を奏し得たのであつた。

以上の事柄以外に、まだベルタが再會のヘレワードに對して語らねばならぬ事柄としては、アスプラモント城主であつた老騎士の死とか、——ロバートとアスプラモントの姫君とのロマンチックな結婚の物語とか——十字軍に出かけるまでの次第とか——いろいろある筈であつた。

ヘレワードはまだ半後の物語りを、ベルタの唇から詳しく聞かないで、合點の行かないやうな節々も無いではなかつたが、突然にその話の途中でベルタとヘレワードとの間に、一寸とした愛の喧嘩が突發して物語りの進行をさまたげてしまつた。と云ふのはベルタがアスプラモントの城内でどんなにひどく云はれても、自分が愛を誓つたベルタと云ふ名前をアガタと代へることを拒絶し、若し之れを承諾したならば、あのオチンの石で誓つたことに背きはしないと、眞實乙女らしい戀人としての眞面目さが溢れ出たとき、それを聞いたヘレワードは可愛さあまつて心が躍りたち前後をわすれて、女の胸を荒く搔き抱いて、燃えたつ感謝の情熱を熱い唇にこめて女に強く接吻をしゃうとした。するとベルタは突嗟にヘレワードを押しつけて、頬には情熱と云ふよりは寧ろ怒の血潮を燃えたせながら、思ひもかけぬ嚴格な顔付きで、

「ヘレワード様。——まだ——まだ——まだ——まだ。もつと退いて下さい。こんなに久し振りに思ひがけなくも會ひましたから、さうなさるのも極めて道理とは思ひますが、——でも將來を思へばわたしたちはサクソンの二豪族の最後のものかも知れませぬ。世間に、ヘレワードとベルタとはサクソンの祖先の愛の作法を忘れたとは云つて、笑はせたくはありません。思つても御覽なさい。わたし達は茲にたつた二人かも知れませぬが、御來祖の魂は身近かにあります。そしてわたした

ちがどんな作法をするかを見護つて居られます。」

と云ふと、ヘレワードは、

「ベルタ。それは思ひ違ひだ。祖先の作法を胸忘れするやうなやくざな人間と、乃公を思ひ違つて呉れるな。今の場合は作法に拘つて居る時ではあるまいぞ。たとひかうしたとて祖先の靈はよもや咎めはすまい。斯うして會つてまたすぐと別れねば——別れねばならぬこの僅かな時をどうして二人は愛の奥に行かうかと悶えて居るのではないか。」

「別れねばならぬとは？」とベルタは思ひがけない、ヘレワードの言葉を恨めしげに聞きとがめた。

「別れねばなるまい。乃公は此の腰の刃にかけて、また此の戦斧の柄にかけて、お前に眞實云ふが乃公の生命は今日かぎり無いものかも知れないぞ。」

「でも貴方はこれから何處へ。此のベルタを捨てたまふで？」とベルタは悲痛な顔でヘレワードを凝視めながら、「貴方は、妾が妾の女主人様の急をお救ひ申さうとするのに、援けやうとはして下さいませぬのですか？」

「何？お前の女主人様とは？」とヘレワードは慍つた聲で、「恥辱だ。此の世にお前が女主人様と

云ふ女性があると思へば、乃公は恥辱を感じるぞ。」

「でも、あの方は慥かに妾にとつては、女主人で御座います。」とベルタ「受けた親切を感謝で酬ゐやうとする人の心があるかぎり、妾はあの方様とは切つても切れない、深い深い縁に繋がつて居ります。」

「して、その女主人様の急と云ふのは？どの様な危険があるのか。お前が女主人様として仕へる程の人ならばさぞや偉い女性であらうと思ふが。」

「あの方の名譽も生命も風前の燈火の様で御座います。あの方は皇儲ブレ=ウスに仕合をお挑みになりましたが、皇儲は何の様な卑劣な手段をとるかわかりませぬ。女主人のお命の瀬戸際で御座います。」

「だがそのお方の女主人と云ふのは、之れまで幾度も武道の仕合に勝ちとほし、あの皇儲風情よりももつと偉い敵を仆した腕前の方ではないか。」

「女主人様は武藝の達人には違ひはありませぬが、それは騎士の信義と名譽とが空なものでない西歐でのことで御座ります。ですが此の悪くみばかりの希臘の國ではどんなことになるかわかりませぬ。どうぞ妾の心持を思つて下さい。妾がこんなにわざわざサクソンの服装をして出

て來ましたのは、此のコンスタンチノーブルの都では、サクソンの衣服さへ着て居れば疑ひの眼をかけられないと聞いたからで御座います。妾はどなたでもよいから十字軍の偉い方にはやく會つて、女主人様の急をお告げしやうと思つて居りましたので御座いますが、ほんとに此の様にありません。もう十字軍の勇士のあの崇高い義侠心、名譽心、自分の生命は捨てても他人の難を救はずには居られぬと云ふ騎士の心に縋る外は無いつて居りましたが、今貴方に圖らずも御會ひしました以上は、他の人の援けが何んで要りませう。えゝ。これでほんとにすつかり安心致しました。——ほつと胸を撫ぜおろした様な氣持が致します——妾はこれからすぐと女主人様の許に急いで歸つて、貴方に會ふたことを話して安心させてあげます。」

「いや。一寸。待つて呉れ。乃公の會するベルタ。」とヘレワードは女の袖を引いて、「お前は其の事はもつと沈着に考へて見ねばなるまいぞ。お前が女主人様と呼んで居るフランクの淑女はわれ／＼サクソン人を兜の塵ほどにも思つて居ないで、輕蔑の眼で見ればかり居る仲間の一人では無いか。フランク族とし云へば、われ／＼サクソン族を絶えず異教徒か未信者かとばかり見做して居て、現にお前と云ふ自由に生れた女に、奴隷の仕事させたのではないか。あの女の父の劍には何度サクソン人の血が濡らされたか知れず——恐らくワルテオフ家エンゲルレド家の血潮が、

あの劍を最も色濃く染めたであらう。それにあの女は随分な生意氣もので、女性の分際にかゝはらず男の眞似をして、武藝に身を窺す痴れものだ。それにもう十字軍と云へば残らず海を渡つて彼方の亞細亞の岸に行つてしまつたから、向ふの聖地に向けてこそ戰つて行け、こちらに歸つてあの女の身代りにならうと云ふ者は一人もあるまい。よしんば歸らうと思つたところで、十字軍の兵士は一人もこちらに引きかへさしてはならぬと云ふ皇帝陛下の嚴命が下つて居る以上、どうする事も出来まい。」

「あれ——思ひがけないその御言葉。」とベルタは意外のことに愕き悲みながら、天と地とが逆しまになつたのでせうか。妾の知つたあのワルテオフ家の息子は勇敢で、卑怯と云ふことは微塵も無く、他人の難を見れば生命かまず救ひに行く、勇士でありましたのに——妾は——妾はさうとばかり思ひ込んで居ましたのに、再びめぐり遭ふて見れば、その人の心は冷たく自分の事ばかり考へて卑怯な思案ばかりをめぐらせて……」

「黙れ。ベルターとヘレワードは形を正して、「お前は乃公を判斷する前に先づ乃公を知れ。ロバート伯爵の夫人ブレンヒルダは今乃公が云つた様な女性ではあるが、仕合の場には勇ましく騎士の妻として出場させるがよい。會圖の喇叭が三度鳴り渡つて、愈々仕合が宣せられる時となれば、

ブレンヒルダの代りに、彼女の夫ロバート伯が出場するであらう。若しロバート伯が出場しなかつた場合は、ベルダ、此のヘレワードが必ず出場して見せる。」

「エツ。本當に。本當に貴方が？」と俄かにベルタは狂喜して叫ぶ、それでこそ流石にワルテオフ家の息子らしい貴方。妾はうれしい。ほんとの血の通つたヘレワード様で貴方はありました。ワルテオフ家の勇ましい勇ましい血が本當に貴方の胸にあります。——さあ、妾はすぐと歸つて此の悦ばしい報せを女主人様にいたませう。ほんとに神様が天におはせばこそ正しい此の仕合で正しい勇者が勝つことになるので御座いませう。ですが、今、貴方はロバート伯爵とお仰いしましたが、伯爵殿は自由な身で居らせられますか——伯爵はと問はれたら、どう答へませう。」

「ブレンヒルダ夫人を悦ばしてやれ。今ロバート伯爵は新たに得た心の友——いや友と云ひかねるかも知れぬが、新たに得た知己の敵と云つてもよい。何れにしても、武名を俱に誓つた知己の手で、その驚天動地の振舞ひをすこし押し忍ばしめて、保護されてあると傳へるがよい。それならば、さあ、急げ、急げ、戀人。」

ヘレワードが此の言葉を云ひも終らぬに、今度はベルタは前の時の態度にも引きかへて悦しい言葉を一つ二つそれもこみあげる情熱で、口が塞つてよくは云へず、たゞひたすらに夫の腕のな

かに身を投げかけて、口で云へない感謝の心を荒い接吻で、ひた押しに押しつけたのであつた。

かうして戀人同志は別れた。ベルタはブレンヒルダの居る老哲人の秘密の涼亭の方に行き、不安の心持で居る女主人に此の物語をした。ヘレワードは、例の黒坊婦人が扉の番をして居る門の方から出てゆかうとすると、その黒坊婦人の顔ににや／＼笑が浮いて居る。何だとばかりヘレワードが詰り顔をする、かくしたつて駄目ですよ。あのサクソンの別嬪さんとの御美しい一幕、はつきりとたしかに此の眼で見とゞけ致しましたからには、後日只ではおきませぬなどと云ふのを尻目にかけて、それでもその手に金貨の一つを握らせて、ほくほくさせながら、他人には夢々云ふなと堅い口止をして、矢の様にその場を馳り抜け、戦斧隊の屯營所へと歸つて來た。——心のうちでは「ロバート伯に何か食物を興へて置かねばならぬことをすつかり忘れて居た。さぞやひもじい事であらう」と急りながら。

饑渴の感情は、何か傍らに愉快なもの、或は優しく慰めるものが無い場合には、すぐと憤怒、激越の感情に變化するものと云ふことは、屢々心理學者の云ふところであるが、騎士時代の剛勇バリーの伯爵、ロバートも恐らく此の御多分に漏れなかつたと見える。ロバートはあまり長いこと空腹を我慢しとほしたため、ヘレワードが歸つて來てやつと顔を見せたその時發した言葉には

多少勘忍袋の緒を切らした様な語調があつたことは免かれないのは無論だが、同時にまたその言葉を受けとつたヘレワードの方から云へば、折角此の長い時間を、たゞ伯爵夫人及び伯爵の爲めにばかり奔走して歸つて來たのに、うれしい飛びたつ様な顔を見せてくれぬが物足らなく思へるのも無理からぬことだ。

ロバートはヘレワードの顔を見るがはいか、まるで地位の上のものが下のものに向つて、不平の感情でもあらはすと云つた様な調子で、冷々然と木で鼻をくゞつた様に、

「どうも夥しく氣が利かんぢやないかね、貴公は乃公をわざわざ宿所に來い、と呼んで置きながら——此の待遇は何うだい。いやしくも眞の基督教國でバリーの伯爵と云へば、飛ぶ鳥もおとす武名があるんだ。まかりちがつて傭兵風情と同じ食卓につくさへ身を羞づる位なのに、——まあ御馳走はどうでもよいとして、生命の繋げる位なものを用意して呉れてもよいではないか。」

するとヘレワードも一本かへした。

「成る程。飛ぶ鳥をおとす偉い地位の高いお方かも知れぬが、此の乃公の様なものの宿所の居候となつたからには我慢が何より第一ぢや。お主人の貧乏振り、周囲の形勢とを見た日には、何の贅澤も云へた場合ではないではないか。一日に一度以上の食事にありつけなかつたからとて、不足

を云ふのは貴殿の武士氣質にも似合んぢやないか。はつは。」

と斯う云つて、ヘレワードは半分怒つて半分笑ひながら、手をひとく叩くと彼の從卒のエドリツクがやつて來た。ロバートは思ひがけなくも第三者が這入つて來たのを見て、一寸驚いた様子であつたが、ヘレワードはそれには介意はず、

「オイ。エドリツク。何か此の珍らしいお客様に御馳走する様なものがあるか。」

「何もありませぬ。たゞ冷たくなつた鰻肉餅ウナギが残つて居るきりで御座いますが、それも今朝の貴殿のあの剛勢な健啖に出くはして、醜く崩れてしまつて居ります。」

「それでもよい。持つて來い。」

命ぜられたまゝに従卒はすぐと持つて來た。見れば巨大な皿の上のせてはあるが、鰻肉餅の恰好は、如何にも今朝の食卓で各方面から、痛快な襲撃を受けたことを明瞭に物語つて居て、形はすっかり崩れてしまひ、とても手のつけられさうもない残骸になつてしまつて居る。ロバートはもとよりノルマンの貴族で、日頃から美食をやる方であるから、流石に空腹ではあるものの、鰻肉餅の此の惨たる醜態を見てはなかなか手が出せず、伯の心のうちでは、一時食欲と品格慾とがすさまじい激戦をやつて居た。だがひもじい腹を抑えてつくづく、その鰻肉餅の恰好を見つ

めて居ると、僅かに一角だけ、まだ唯の手もついて居ないらしい處が残つて居たので、とうとう食欲が品格欲の上に辛くも打ち克つた。

ロバートはぐつと手をのばして、その一角を掴みとつて口に頬張り、更に赤い強烈な酒壇からなみなみと杯にうつして飲み、やつと腹の蟲が承知したと云ふ顔つきで、ペレワードの方を見てにやりと微笑むだ、よい心地になると同時に、自分の無さまも顧みられて、はつはと笑ひながら、「いやペレワード殿。乃公こそ一人で食つてしまつて、大さうな無躰をしたことが今更羞しい。乃公のむさぼり食ふ態はまるで猪にでも似て居たらうな。貴公の分も残して置かねばなるまい。いや腹がへると騎士も我むしやらなものだ。」

と云つてペレワードの方に大皿を押しやると、
「いや。それは御互ひ様だ。」

と云つてペレワードも手をのばして、自分の今朝の食ひのこりの一角をもぎ取り、おそろしい速力で貪り食ひ、盛に口をもちやもちやさせた。ペレワードも頼る空腹を我慢して居たところだったので、その貪り食ふ有様は野猪以上に荒く、今度は伯爵の方がやゝ辟易して、すこしく身を退いて、エドリツクの方にもすゝめると、さきから待つて居たとばかり大食ひの従卒が、すつか

り綺麗に大皿を喰べてしまつた。

ロバート伯はすつかりよい氣分になつて、今までペレワードに問はう問はうと唇におしよせた問ひたい質問を出した。

「どうだつたね。ペレワード殿。乃公の貞節な妻ブレンヒルダに就いてのその後の御探聞は？」

ペレワードはしつかりと勿體をつけて、

「ウム。あるとも、あるとも。」

*

君府の空に喇叭が二度鳴つた日は、君府は忽ち大騒擾の地と化してしまつた。暴風の吹きまくつた秋の枯葉の様に數多の市民は逃げまどい、人馬のあはたどしい狼狽と、弓矢、楯、劔、戦斧の怖しい混雑と、叫喚とのなかに老臣アゼラスは刺され、皇儲ブレニウスの首は飛び、アキレス將軍は何處へか姿をかくし、ウルセルが地獄牢から解放されてしまつた時、あだかも轟々鳴つた雷がおちて、あざやかに虹が現れ出る様に四騎の堂々たる姿が、ボラホラス海岸から舟に乗つて、悠々岸のかなたの亞細亞をさして行くのが認められた。

その四騎士のうち二人は女騎士であつた。

あゝ、十字軍！
あゝ。聖地エレサレムへ！

十字軍

昭和十四年六月十五日印刷
昭和十四年六月二十日發行

定價 一圓六十錢
外地定價 一圓七十六錢

著作者 加藤朝鳥

發行者 赤塚三郎
東京市小石川區瀧町五番地

發行所 赤塚書房
東京市小石川區瀧町五番地
電話大塚五四二番

印刷者 宮島富治
東京市小石川區瀧町五番地

十和田操著

(櫻木俊晃装)

長篇小説

屋根裏出身

定價一圓

この小説は作者に云はせると「屋根裏出身」ですが、讀者から見れば「屋根裏探險」なのです。よみ出したら、こんな楽しい人情の世界があるのか、と思はずうれしくなつて了ふのです。萬華鏡と云ふ、子供の玩具がありますが、この小説こそは、千變萬華鏡のやうに、くるりくるる、いくら読み直しても興味が盡きません。そして、この小説だけは、つまらんレッテルなど貼られぬ、唯一無二の純情さを保つてゐることを誇りませう。

赤塚書房版

長篇

痴人淨土

張赫宙著

四六判三〇〇頁
定價一圓三十錢

福岡日日々連載の名作

生れ故郷では凡ての人に一痴人として嘲罵の生活をよぎなくされてゐた一人の少年をラツシ來たつて、全く彼を知らない半島南端のとある農村の叔父の元で生活させた。そこでも次々と障害は起つた。けれども暖い理解のある生活を築こうとの意慾に燃える彼は遂にそれらの障害に打勝つ日が來た。この物語に讀者は切々と迫る情愛と盡きざる興味に吾を忘れるであらう。

事變下第一の面白い讀物として必讀の良書である。

赤塚書房版

最新刊好評書

小説集 くるろ土 中谷孝雄著 定價一圓二十錢 送料十錢

隨筆集 四季 伊藤整著 定價九十錢 送料十錢

小説集 蛭の仲間 一條正著 定價一圓五十錢 送料十錢

390
124

新刊好書
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

終

